

288-23

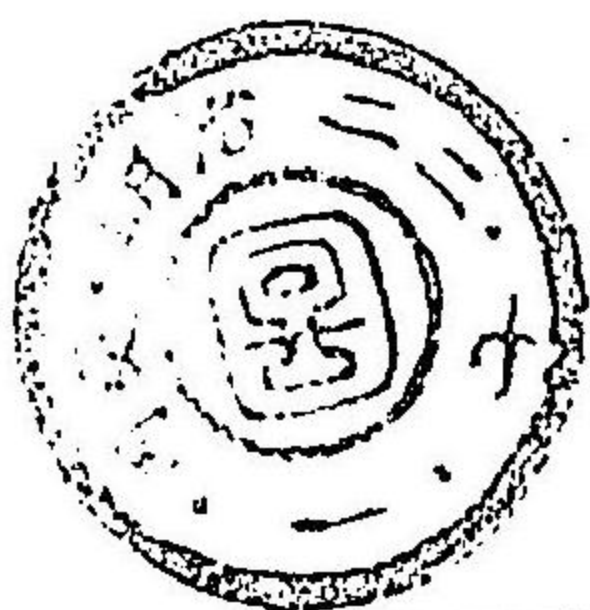
W217010

38.60

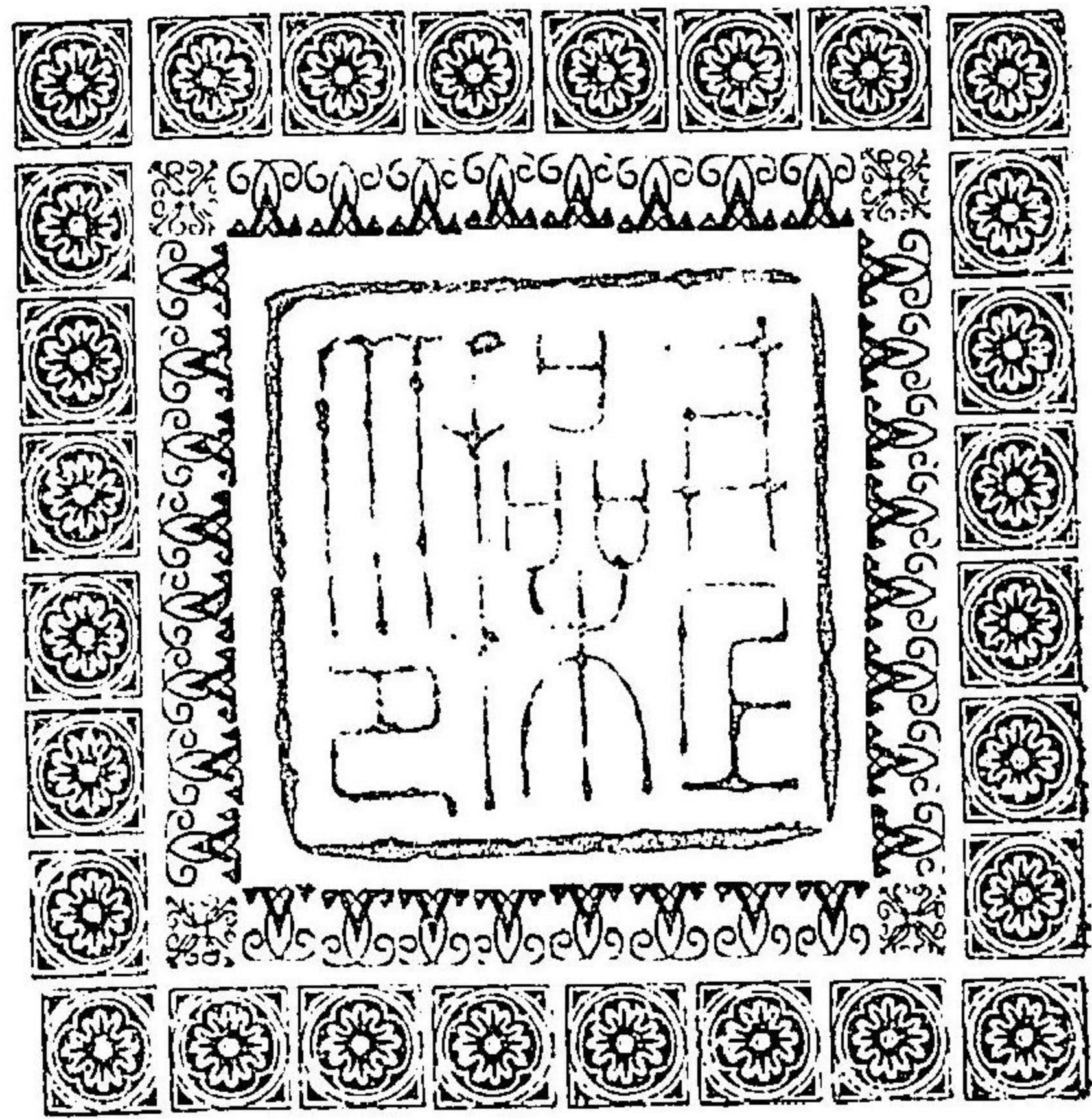
大英帝國憲法

皇室典範及附屬法

目控訴院評定官
 本律學士 井上操 著



寶文館發兌



憲法述義序

余嘗テ東京ニ在リ明治法律學校ニ於テ明治十九年一月以來日本行政法ヲ講スルニ當リ古來ノ律法ト當時ノ法令トヲ參酌シ憲法中ニ入ルヘキモノヲ集メテ之ヲ説述シ又大阪ニ在テハ關西法律學校ニ於テ明治二十一年十月以來日本行政法ヲ講シ更ニ憲法中ニ入ルヘキモノヲ集メテ之ヲ説述シタリ明治二十二年二月憲法ノ發布セララル。ニ及ヒ嘗テ二學校ニ於テ説述セシ所ト對照スルニ彼此相吻合シ其所説中直チニ採テ憲法ノ註解ト爲スヘキモノ多シ仍テ之ヲ集メテ更ニ訂正増

補シ名ケテ憲法述義トイヒ後學ノ士ニ頌ツ後學
ノ士依テ憲法ノ一斑ヲ知ルコトヲ得ハ幸甚
明治廿二年五月

法律學士 井上 操識

大日本帝國憲法述義目錄

緒言

第一章	國初	一	丁
第二章	國本即チ邦國構成ノ元素	九	丁
第三章	君臣ノ義	十六	丁
第四章	憲法ノ由來	二十二	丁
第五章	日本ニ特別ナル君臣ノ關係	二十七	丁
大日本帝國憲法			
憲法發布勅語告文及ヒ上諭			
第一章	憲法ノ解	三十一	丁
第二章	天皇 附皇室典範	三十七	丁
第三章	三大權ノ分立	六十七	丁

○目錄

第四章 立法權

七十二丁

第一欸 天皇

全丁

第二欸 帝國議會

七十九丁

第五章 行政權

八十五丁

第一欸 天皇

全丁

第二欸 國務大臣及ヒ樞密顧問

百十四丁

第六章 司法權

百三十丁

第七章 臣民權利義務

百五十一丁

第八章 會計

二百七十七丁

第九章 補則

三百十丁

附錄 議院法

第一章 帝國議會ノ召集成立及ヒ開會

三百十七丁

第二章 議長書記官及ヒ經費

三百六十七丁

第三章 議長副議長及ヒ議員歳費

三百六十九丁

第四章 委員

三百七十二丁

第五章 會議

三百七十四丁

第六章 停會閉會

三百八十丁

第七章 秘密會議

三百八十五丁

第八章 豫算案ノ議定

三百八十六丁

第九章 國務大臣及ヒ政府委員

三百八十七丁

第十章 質問

三百九十二丁

第十一章 上奏及ヒ建議

三百九十四丁

第十二章 兩議員關係

三百九十六丁

第十三章 請願

四百丁

○目錄

№1789

第十四章 議員、人民官府及ヒ地方議會 四百四丁
 トノ關係

第十五章 除名、退職及ヒ議員資格ノ異議 四百六丁

第十六章 請假、辭職及ヒ補闕 四百十丁

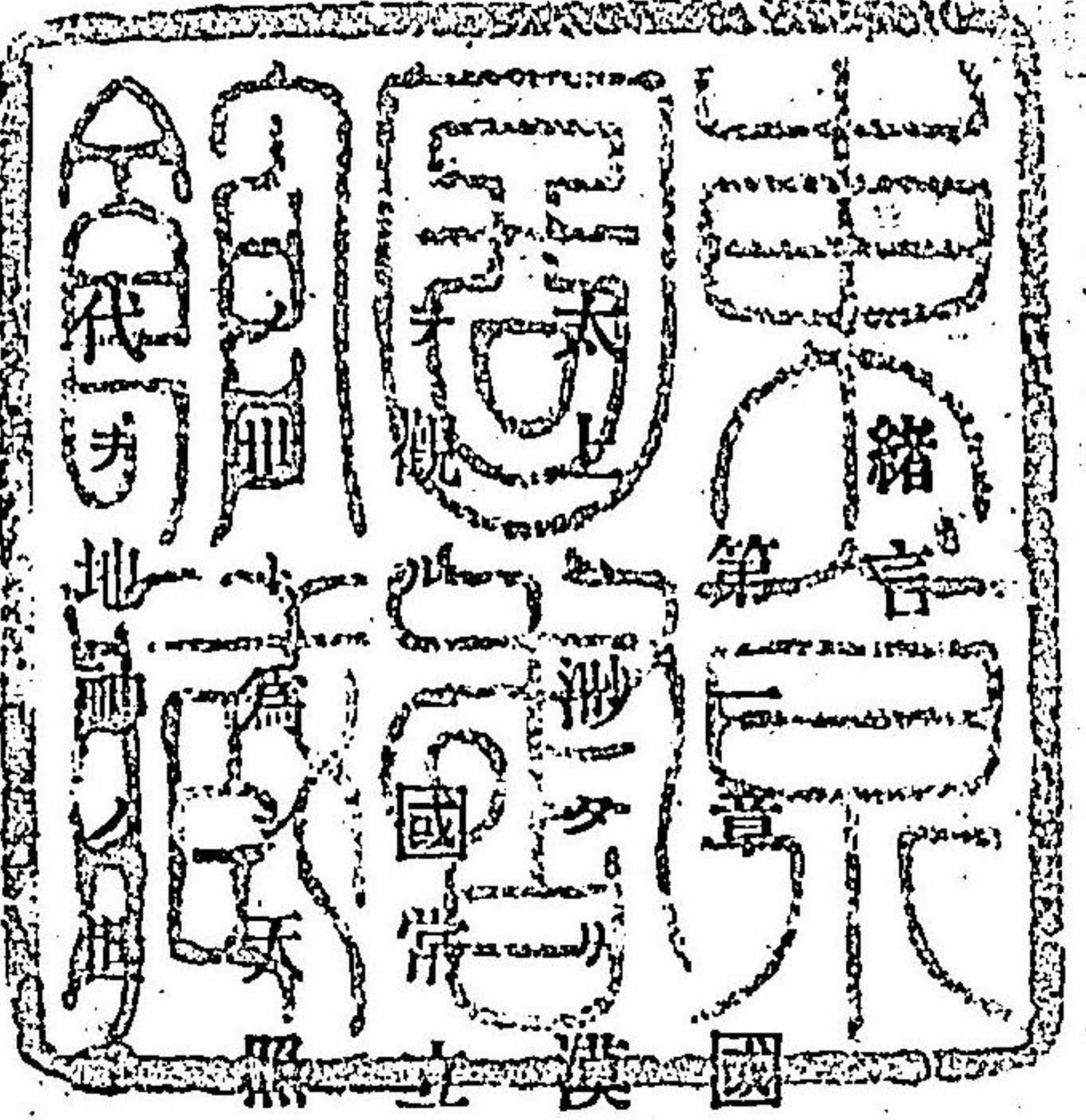
第十七章 紀律及ヒ警察 四百十一丁

第十八章 懲罰 四百十四丁

目錄畢

大日本帝國憲法述義

法律學士 井上操 著



初 國初
 尊ヨリ伊弉諾尊伊弉册尊マテ七代ヲ天神
 大神ヨリ彦波瀲武鸕鷀羽尊不合尊ハテ五
 爲シ神武天皇ヨリ以下チ人皇ノ世ト爲ス
 天神七代ハ天地未タ剖判セサルノ前ニシテ所謂ル混沌タ
 ルモノナリ此時ニ當リ伊弉諾伊弉册ノ二尊共ニ天ノ浮橋
 ニ立チ天ノ瓊杵ヲ以テ滄溟ヲ探リ碣馭盧島ヲ作成シテ此
 ニ降居シ然シテ國土山川草木及ヒ群神蒼生ヲ化生セラレ

○國初

之ヲ國初ト爲ス思フニ天神ノ世ハ即チ所謂ル前世界ニシ
テ地神以後ハ即チ今世界ナルヘシ天照大神ハ伊弉諾伊弉
冊尊ノ所生ニシテ地神ノ初ナレハ即チ是レ日本國開闢ノ
神ナリ
天照大神ノ子ヲ正哉吾勝々速日天忍穗耳尊ト云フ高皇產
靈尊ノ女栲幡千千姫ヲ娶テ天津彦彦火瓊瓊杵尊ヲ生ム皇
祖高皇產靈尊特ニ鍾愛シテ皇孫瓊々杵尊ヲ立テ葦原中國
ノ主ト爲サント欲ス然ルニ大己貴神其子事代主神等葦原
中國ヲ占領シテ從ハス數回神使ヲ遣ハシ歸順ヲ促ス後終
ニ其使命ニ從フニ及ヒ皇孫瓊々杵尊カ日向ノ高千穗峯ニ
降ラル、ニ當リ天照大神ノ神勅アリ左ノ如シ(日本書紀ノ
一書ニ據ル)

若然者方當降ニ吾兒矣且將降間皇孫已生號曰天津彦彦火
瓊々杵尊時有奏曰欲以下此皇孫代降上故天照大神乃賜天津
彦彦火瓊々杵尊八阪瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物又
以中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命猿女上祖天鈿女命
鏡作上祖石凝姥命主作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因
勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之也宜
爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣

天孫瓊々杵尊降臨以來今ニ至ルマテ皇統一系曾テ他姓ヲ
交ヘサルモノ實ニ此神勅ノ如シ此神勅ハ則チ我國建國法
ノ第一ニ位ニキモノナリ
神武天皇ハ諱ヲ彦彦火々出見トイヒ小名ヲ狹野ト稱シ神日
本磐余彦尊ト號ス天照大神五世ノ孫ニシテ彦波瀲武鸕鷀

○國初

羽葺不合尊ノ第四子ナリ天皇日向ノ高千穂ノ宮ニ在リ諸皇族ヲ會シ議シテ曰ク此瑞穂ノ國ハ我祖宗ノ天ニ受クル所ナルモ連草昧ニ屬シテ此西偏ニ居リ多ク年所ヲ歴タリ顧フニ四方未タ王澤ニ霑ハス遂ニ邑ニ君アリ村ニ長アリ各相凌轢スルニ至ラシメ之ヲ能ク統一ニスルコトナシ吾聞ク東方ニ美地アリ山岳四周シ以テ大業ヲ恢弘スルニ足ルモ饒速日命ナル者アリ我祖ノ支屬ト稱シ長髓彦ナル者ニ推尊セラレ先ツ此地ヲ占領スト吾之ヲ掃蕩シ都ヲ定メ遂ニ四方ヲ經營セント欲スト乃チ親ヲ將トシテ長髓彦ヲ擊チ饒速日カ長髓彦ヲ殺シテ來降スルニ及ヒ都ヲ大和國畝傍山ノ東南樞原ノ地ニ立テ天皇ノ位ニ即ク是レヨリ以來二千五百四十九年ニシテ皇位ノ繼承スル一百二十二代

ニ至ル其間天下擾亂ナキニアラス又時ニ或ハ神器ヲ覬覦スル僧道鏡ノ如キアリト雖モ終ニ君臣ノ分ヲ亂スニ至ラサリキ
以上ハ我國ノ大畧ナリ尙ホ參考ノ爲メニ他邦ノ大畧ヲ述ヘン
支那ノ史ヲ閱スルニ天皇氏地皇氏人皇氏アリト雖モ其事跡ノ見ルヘキナシ又伏羲神農黃帝等アリ其事跡ハ僅ニ見ルヘキモノアリト雖モ要スルニ明了ナラス其文獻ノ微スヘキハ帝堯陶唐氏以後ニ在リ帝堯陶唐氏ハ帝嚳高辛氏ノ子ニシテ十三年ニシテ陶ニ封セラレ十五年ニシテ唐ニ封セラレ帝堯ノ兄ヲ帝摯トイヒ在位九年ニシテ天人ノ厭棄スル所ト爲リ諸侯堯ヲ尊テ天子ト爲シ十六年ニシテ天子

○國初

ノ位ニ即シ其子丹朱不肖ナルヲ以テ賢ヲ求メテ帝舜ヲ得
 終ニ天子ノ位ヲ讓ル帝舜有虞氏ハ瞽瞍ノ子ニシテ歷山ニ
 耕シ雷澤ニ漁シ河濱ニ陶シテ農夫タリ漁夫タリ工夫タル
 一民ナリ帝堯ノ爲メニ登用セラレ二十八載ノ間政ヲ攝シ
 堯崩シ喪畢リテ天子ノ位ヲ踐ミ堯ノ子朱ヲ丹ニ封シ己レ
 ノ弟象ヲ有庠ニ封ス帝舜ノ子モ亦不肖ナルヲ以テ賢ヲ求
 メテ大禹ヲ得終ニ天子ノ位ヲ讓ル夏后禹ハ崇伯鯀ノ子ニ
 シテ帝舜ノ爲メニ登用セラレ其父鯀ニ代リテ水ヲ治メテ
 大功アリ十七年ノ間政ヲ攝シ帝舜崩シテ天子ノ位ヲ踐ム
 在位八歳ニシテ伯益ヲ天ニ薦メ己レニ代ハラシメントセ
 シモ國人禹ノ子啓ニ服歸シ帝啓終ニ天子ノ位ニ即シ其以
 後ハ賢ヲ求ムルコト見ユス皆其子孫カ當然天子ノ位ヲ世

襲セリ夏后ヨリ現政府清朝ニ至ルマテ政府ヲ革メタルコ
 ト大凡二十四ナリ然ルニ天下ハ天子ノ天下ニシテ相將固
 ヨリ種アリトスルモノ、如シ理ヲ以テ論スレハ天下ハ天
 下ノ天下ニシテ相將亦豈種アランヤ然レモ我日本ノ如キ
 ハ固トヨリ他ニ類例ナキモノニシテ支那其他諸邦國ノ例
 ナ以テ論スヘカラスナルノミナラス支那等ノ如キモ已ニ政
 府ヲ確立シテ其國民ノ認ムル所ト爲リ他與國ノ許ス所ト
 爲リタル以上ハ容易ニ變更スヘキニアラス
 西洋史傳ニ言フ所ヲ觀ルニ世界ノ開闢ハ今ヲ距ル凡ソ六
 千年前ナリ亞細亞ノ西部邊留斯亞地方ニ河アリユーフラッ
 トトイフアダム及ヒエーウ夫妻カ初テ生レタルハ此河邊
 ナリ然ルニ其子孫多キモ造物主ヲ崇敬セサルヲ以テ夫妻

○國初

ノ出生後六百六十五年ニシテ大洪水ノ爲メニ亡滅セリ只
其子孫ニテ獨ノアノ船ニ乘リテ洪水ノ難ヲ免レアラッ
ト山ニ至リテ助命スルヲ得タリノアニ三子アリ一チシユム
ト言ヒ一チハムト言ヒ一チシアフエスト言フシユムノ子孫ハ印
度ニ廣リテ亞細亞ノ祖ト爲リハムノ子孫ハ埃及ニ行キテ
亞弗利加ノ祖ト爲リシアフエスノ子孫ハ希臘ニ行キテ歐羅巴
ノ祖ト爲リタリ而シテ其子孫或ハアッシリヤノ國王ト爲リ
或ハ埃及ノ國王ト爲リ開關後千七百七十八年紀元前二千
二百二十三年ノ頃ニハ各處ニ王ト稱スル者アリ一興一廢
互ニ戰爭セシモノ、如シ故ニ太古ノ狀況ハ得テ詳ニスハ
カラサルモ已ニ紀元二千年前ニ在テ國王ノ如キ者アリシ
ニハ相違ナカルヘク而シテ賢チ擧ケテ國君ト爲スニハア

ラスシテ子孫相因襲スルモノ、如ク見ユルナリ獨亞米利
加合衆國ノミ歐人ノ移住ヨリ成ルヲ以テ國初ヨリ共和ヲ
以テ其國體ト爲シタリ

第二章 國本即チ邦國構成ノ元素

史傳ニ載スル所ノ概畧ハ以上説述シシカ如シ然レモ世界
ノ開關スル所以ニ至テハ知ルヘカラス即チ何ノ爲メニ世
界アリヤ又世界ハ自然ニシテ成ルモノナルヤ將タ造物主
ナル者アリテ作りタルヤ若シ造物主アリトセハ造物主ハ
何ノ爲メニアリ又造物主ハ何ニ因テ成リシヤ此等ハ總テ
知ルヘカラス又強ヒテ知ルノ必要モナカルヘキナリ然レ
モ已ニ此大本ニ於テ知ルヘカラスニ於テハ其他ノ事モ
亦知ルヘカラスナリ或ハ道アリトイヒ或ハ法アリトイ

○國本即チ邦國構成ノ元素

父子有親トハ父子ノ倫ハ天性ニ出テ自然ニ血統ノ繼承シ
 テ互ニ親屬タルチイ故ニ父子ノ親ハ絶タント欲スルモ
 得ヘカラス是レ其自然ノ血統ニ係ルカ故ナリ君臣有義ト
 ハ君臣ノ分ハ國家ヲ保持スルカ爲メニ缺クヘカラサル事宜
 アリテ成ルチイフ義ハ宜ナリ事ノ宜シキチイフ君臣ノ倫ハ
 國事ノ宜チ得ソカ爲メニ生スルモノナリ而シテ君ハ首領ノ
 總稱ニシテ臣ハ從屬ノ總稱ナリ共和國ノ大統領ノ如キモ亦
 是レ君ニシテ其人民ハ即チ之ニ對シテ臣屬タリ或ハ帝トイ
 ヒ或ハ王トイヒ或ハ統領トイフ其名チ異ニスト雖モ其實
 ハ一ナリ其國體チ異ニシ政體チ異ニスルモ皆其國ノ宜キ
 ニ從フナリ其義タルニ至テハ即チ一ナリ凡ソ事ノ宜シキ
 ハ時ト處トニ從テ一様ナラス要スルニ人ノ意思ト所爲ト
 ニ依テ其宜シキチ異ニス宜義ハ人爲ニ出ルチ以テ亦人爲
 チ以テ之チ變更スルコトアルヘキナリ故ニ彼ノ殘賊ノ獨
 夫紂ノ如キニ至テハ君臣ノ義絶ス而シテ民心ノ歸向シテ
 天吏タル湯武ノ放伐スルカ如キハ時ニ其事宜ニ適スルモ
 ノナリ故ニ孟子曰○賊レ仁者謂之ヲ賊○賊レ義者謂之ヲ殘○殘賊之人○謂之
 之ヲ匹夫○聞レテ誅ニ匹夫紂矣○未聞レテ弑レ君也ト然レモ這ハ是レ大ニ注
 意セサルヘカラサル所ナリ其國ハ支那ニシテ其君ハ桀紂
 タリ臣ハ湯武タルニ於テハ事宜ニ適スヘシト雖モ然ラサ
 レハ之ニ反ス其事ノ義不義ハ原因ノ正否ト結果ノ善惡ト
 ニ依ルコトナリ朱子ハ宋入ナリ然ルニ孟子集註ノ下文ニ
 王勉ノ語ヲ擧ケテ萬世臣タル者ノ大戒ヲ著ハシタリ王勉
 曰斯言也○惟在下者有湯武之仁○而在上者有桀紂之暴○則可不

○國本即チ邦國構成ノ元素

ヲモ皆唯事跡ニ於テ想像ス。其ノミ眞ニ所謂ル法ヲリ道ヲ
 ルモソハ如何ナルヘキヤハ人智ノ得テ知ルヘキニアラサ
 ルナリ只古來ノ實跡ニ徴シテイハ人ハ生レテ而シテ結
 婚シ結婚シテ而シテ嗣子ヲ舉ケ嗣子ヲ舉ケテ而シテ死ス
 ルハ是レ人ノ大道本法タルヘキモノナリ而シテ之ヲ要ス
 ルニ其一生ヲ全フスルニ在ルノミ所謂ル康福ナルモノモ
 他アルニアラス
 一生ヲ全クシ康福ヲ得ノニハ衣食住ニ缺クル所ナクシテ
 身體ノ健康ヲ保タサルヘカラス是レ一人ノ康福ナリ然ル
 ニ男アレハ必ス女アリ女アレハ男ナキ能ハス已ニ男女アレ
 ハ隨テ父子アリ兄弟アリ已ニ父子アリ兄弟アレハ朋友ア
 リ朋友アルニ至テハ君臣ナキコト能ハス故ニ曰ク男女居

レ室ニ人之大倫也ト而シテ邦國ハ一家ヨリ成ル故ニ一國ノ中
 ニハ必ス父子君臣夫婦長幼朋友アリ之ヲ五倫トイフ一國
 ハ五倫ヨリ構成シ五倫ハ一國ノ元素タリ此五倫ニシテ亂
 レサレハ一國治平無事ニシテ人ノ福利タル之ニ過クルモ
 ノアルヘカラス五倫各其序ヲ得テ亂レサレノコトヲ欲ス
 ルキハ父子有レ親。君臣有レ義。夫婦有レ別。長幼有レ序。朋友有レ信ヲ要
 ス之ヲ五常トイヒ又五典トイフ實ニ天下ノ達道ナリ五倫
 五常ハ一國ノ大本ニシテ建國法行政法其他萬般ノ法律ヲ
 設クルハ皆倫常ヲ保持シテ亂ル、コトナカラシメシメカ爲
 メナリ而シテ倫常ノ本ハ一身ニ在リ人々其一身ノ福利ヲ
 得ハ倫常其正キヲ得テ而シテ一國自ラ安寧ナルヘキナリ
 故ニ曰ク物有本末。事有終始。知所先後。則近道ニ矣。

○國本即チ邦國構成ノ元素

父子有親トハ父子ノ縁ハ天性ニ出テ自然ニ血統ノ繼承シテ互ニ親屬タルナイ故ニ父子ノ親ハ絶タント欲スルモ得ヘカラス是レ其自然ノ血統ニ係ルカ故ナリ君臣有義トハ君臣ノ分ハ國家ヲ保持スルカ爲メニ缺クヘカラサル事宜アリテ成ルチイフ義ハ宜ナリ事ノ宜シキチイフ君臣ノ倫ハ國事ノ宜チ得ンカ爲メニ生スルモノナリ而シテ君ハ首領ノ總稱ニシテ臣ハ從屬ノ總稱ナリ共和國ノ大統領ノ如キモ亦是レ君ニシテ其人民ハ即チ之ニ對シテ臣屬タリ或ハ帝トイヒ或ハ王トイヒ或ハ統領トイフ其名チ異ニスト雖モ其實ハ一ナリ其國體チ異ニシ政體チ異ニスルモ皆其國ノ宜キニ從フナリ其義タルニ至テハ即チ一ナリ凡ソ事ノ宜シキハ時ト處トニ從テ一様ナラス要スルニ人ノ意思ト所爲ト

ニ依テ其宜シキチ異ニス宜義ハ人爲ニ出ルチ以テ亦人爲チ以テ之チ變更スルコトアルヘキナリ故ニ彼ノ殘賊ノ獨夫紂ノ如キニ至テハ君臣ノ義絶ス而シテ民心ノ歸向シテ天吏タル湯武ノ放伐スルカ如キハ時ニ其事宜ニ適スルモノナリ故ニ孟子曰○賊^{スル}仁^ヲ者謂^ヒ之^ヲ賊○賊^ト義^ヲ者謂^フ之^ヲ殘○殘賊之人○謂^フ之^ヲ匹夫^ト○聞^ク誅^ニ匹夫^ヲ紂^ニ矣○未^ダ聞^カ弑^レ君^ヲ也ト然レモ這ハ是レ大ニ注意セサルヘカラサル所ナリ其國ハ支那ニシテ其君ハ桀紂タリ臣ハ湯武タルニ於テハ事宜ニ適スヘシト雖モ然ラサレハ之ニ反ス其事ノ義不義ハ原因ノ正否ト結果ノ善惡トニ依ルコトナリ朱子ハ宋人ナリ然ルニ孟子集註ノ下文ニ王勉ノ語ヲ擧ケテ萬世臣タル者ノ大戒ヲ著ハシタリ王勉曰斯言也○惟在下者有湯武之仁○而在上者有桀紂之暴○則可不

○國本即チ邦國構成ノ元素

然^レ是未^レ免^レ於^二篡弒之罪^一也ト支那ノ如キ國ニ於テ尙ホ且ツ如此キノ戒アリ况^ンヤ萬世一系ニシテ之ト同視スヘカヲサル國ニ於テヤ夫婦有別アリトハ古説ニハ夫ハ外ヲ治メ婦ハ内ヲ治ムルカ如ク夫ノ爲スヘキ所ト婦ノ爲スヘキ所ト差別アルモノ、如クイヘトモ余ノ所見ハ之ニ異ナリ夫婦ハ一男一女ノ結社ニシテ甲ノ夫婦ト乙ノ夫婦ト差別アルヲイフ此差別アルカ故ニ夫婦ノ名アリ男ニシテ定リタル女ナク又女ニシテ定リタル男ナクハ如何^ン之ヲ夫婦トイフヲ得^ン有夫姦ヲ罰スルハ即チ夫婦ノ別ヲ明ニスル所以ナリ又國安ヲ維持スル所以ナリ夫婦ハ即チ一國構成ノ一元素タルカ故ニ其別ヲ失ヘハ則チ是レ國亂ノ一原由ト爲ル長幼有序トハ親屬他人ニ論ナク長ヲ先キニシ幼ヲ後ニス

ルノ謂ニシテ君臣ノ如キ特別ノ事情アル者ヲ除キテ人ノ次序ヲ正タサントスルモハ長幼ヲ以スルノ外ナカルヘシ而シテ長幼ハ實ニ年ノ次序ニ依テ成ルモノナリ人民平等タリト雖モ衆人相會スル其序ナキ能ハス其序ヲ定メントセハ長幼ヲ以テスルノ外ナカルヘシ故ニ朝廷ニハ爵ヲ尊ヒ卿黨ニハ齒ヲ尊フ齒ハ則チ天下ノ達尊中ノ一ナリ(孟子ニ爵齒德ヲ以テ三達尊ト爲セリ)朋友有信トハ朋友ノ名ハ信ニ依テ立ツモノニシテ信ナキ朋友ニアラス而シテ一國ノ治平ヲ欲スレハ人々皆信アリテ而シテ所謂ル四海皆兄弟タルノ實アラソトヲ要ス以上ハ一國ヲ構成スル五典ノ大畧ナリ五典ニシテ亂レサレハ一國ノ安寧ナルハ論ヲ待タズ故ニ云ク家齊而國治國治而天下平ト而シテ法律ハ

○國本即チ邦國構成ノ元素

則チ此五典ヲ治メ天下ヲ平ニスル所以ナリ

第三章 君臣ノ義

我日本帝國ハ其國初ニ於テ他諸國ト大ニ異ナルヲミナラ
ス實ニ二千五百有餘年ノ久シキ皇統ノ連綿タルヲ以テ慨
レハ天地ト無窮ナルヘキモノナリ然リト雖モ君臣ノ義タ
ルニ至テハ東西古今異ナルコトナカルヘシ左ニ古聖天子
ノ詔ヲ示サン

崇神天皇詔曰。惟我カ皇祖諸天皇等。光臨宸極者。豈爲ニ一身乎。
蓋所下以司牧人神。經綸天下。故能世嗣。迄功時流。至德。今朕奉
承大運。愛育黎元。何當下聿遵皇祖之跡。永保無窮之祚。其群卿
百僚。竭爾忠貞。並安天下。不亦可乎。(日本書紀)
仁德天皇登高。望見人煙稀少。知民貧。乃痛自節儉。宮室不墜。

任其額。圮悉除租稅。二年望見炊煙。盛起喜。語皇后曰。朕富矣。
后曰。屋漏衣敝。何謂富乎。天皇曰。天之立君。爲民也。民之富。乃
朕之富也。

此二詔ニ依リ明ニ君臣ハ義ヲ以テ成ルヲ知ルヘキナリ實
ニ天ノ君ヲ立ルハ民ノ爲ノニシテ君ノ爲ノニアラス豈天
下ヲ以テ一身ヲ私スルヲ得ンヤ然レモ國初ノ法制ハ得テ
詳カニスヘカラス第三十四代推古天皇十二年四月戊辰皇
太子麻戶始テ憲法十七條ヲ作ル之ヲ國憲制立ノ始トス實
ニ紀元一千二百六十四年ナリ亦以テ君臣有義上下有禮政
體ハ則チ立憲タルヘキヲ知ルニ足ル今左ニ其全文ヲ掲ケン
一曰。以和爲貴。無忤爲宗。人皆有黨。亦少違者。是以或不順。君
父。乍違于隣里。然上和下睦。諧於論事。則事理自通。何事不成。

○君臣ノ義

二日。篤敬三寶。三寶者則四生之終歸。萬國之極宗。何世誰人非貴。是法。人鮮尤惡。能教從之。其不歸三寶。何以直枉。

三日。承認必謹。君則天之。臣則地之。天覆地載。四時順行。萬氣得通。地欲覆天。則致壞耳。是以君言臣承。上行下效。故承認必謹。不謹自敗。

四日。群卿百僚。以禮為本。其治民之本。要在於禮。上不禮而下不齊。下無禮。必有罪。是以君臣有禮。位次不乱。百姓有禮。國家自治。

五日。絕奢棄欲。明辨訴訟。其百姓之訴。一日千事。一日尚爾。况乎累歲。頃治訟者。得利為常。見賄聽讞。便有財之訟。如石投水。乏者之訴。似水投石。是以貧民。則不知所由。臣道亦於焉闕。

六日。懲惡勸善。古之良典。是以無匿人善。見惡必匡。其諂詐者

則為下覆。國家之利器。為絕人民之鋒刃。亦佞媚者對上。則好說。下。過逢下。則誹謗。上。失。其如此人。皆無忠於君。無仁於民。是亂之本也。

七日。人各有任。宜不濫。其賢者任官。頌音則起。姦者在官。禍亂則繁。世少生知。克念作聖。事無大小。得人必治。時無急緩。遇賢自寬。因此國家永久。社稷勿危。故古聖王為官。以求人。為人不求官。

八日。郡卿百僚。早朝晏退。公事靡寧。終日難盡。是以遲朝。不逮于急。早退。必事不盡。

九日。信是義本。每事有信。其善惡成敗。要在於信。君臣共信。何事不成。君臣共無信。萬事悉敗。

十日。絕忿棄。不怒。人違。人皆有心。心各有執。彼是則我。我

是則彼非。我必非。聖。彼必非。愚。共是凡夫耳。是非之理。詎能可。定。相共賢愚。如環無端。是以彼人雖瞋。還恐我失。我獨雖得。從衆同舉。

十一日。明察功過。賞罰必當。日者賞不在功。罰不在罪。執事群卿。宜明賞罰。

十二日。國司國造。勿歛百姓。國靡二君。民無二主。率土兆民。以王爲主。所任官司。皆是王臣。何敢與公賦歛百姓。

十三日。諸任官者。同知職掌。或病或使。有關於事。然得知之日。和如曾識。其以非與聞。勿妨公務。

十四日。群卿百僚。無有嫉妬。我既嫉人。人亦嫉我。嫉妬之患。不知其極。所以智勝於己。則不悅。才優於己。則嫉妬。是以五百歲之後。乃令遇賢。千載以難待。一聖其不得賢。聖何能以治國。

十五日。背私向公。是臣之道矣。凡人私必有恨。有恨必非同。非同則以私妨公。恨起則違制害法。故初章云。上和下睦。其亦是情。

十六日。使民以時。古之良典。故冬月有間。以可使民。從春至秋。農桑之節。不可使民。其不農何食。不桑何服。

十七日。大事不可獨斷。必與衆宜論。小事是輕。不可必衆。唯逮論大事。若疑有失。故與衆相辨。辭則得理。辭ハ辨ノ誤ナラン。

今日ヨリ此憲法ヲ觀レハ道德ト法律トヲ混シ幽界ノ事ト明界ノ事トノ別ナク其弊ヤ善ヲ責メ完キヲ求ムルニ至リテ終ニ實行スルヲ得サルヘキノ恐ナキニアラス然レモ今日ノ論理ニ適合シ不易ノ格言トモ稱スヘキモノ亦多ク而シテ治國ノ本ハ要スルニ禮法ニ在テ而シテ大事ハ獨斷ス

○君臣ノ義

ヘカラストイフカ如キハ立憲ノ本旨トイフヘキモノナリ
 之ヲ諸國往古ノ律法ニ比スレハ蓋シ旧ヲ同クシテ論スヘ
 カラサルモノアリ一千年ノ前ニ在テ已ニ如此キノ法律ア
 リ一千年ノ後ナル今日ニ於テハ治國ノ要君臣ノ義ハ完備
 シテ善美ヲ盡クスヘキ道理ナルニ或ハ一千年前ニ愧ル所
 ナキニシモ限ラザルヘシ是レ法律ニ從事スル者ノ最モ心
 ナ盡クシ意ヲ致スヘキ所ニシテ而シテ憲法ハ即チ治國ノ
 要ヲ示シ君臣ノ義ヲ明ニスル所以ナリ

第四章 憲法ノ由來

憲法ハ紀元二千五百四十九年明治二十二年二月十一日紀
 元節ニ於テ頒布セラレタリト雖モ其因源ハ已ニ維新ノ初
 ニ在リ今只之ヲ表章シテ天下ニ明示シタルノミ即チ慶應

三年丁卯十二月十四日ノ御沙汰並ニ慶應四年戊辰三月ノ
 御宸翰ニ徴シテ知ルヘシ御沙汰ノ要ニ云ク王政復古國挽
 回之御基被爲立候間不論既往更始一新自今攝關幕府等廢
 絶即今假ニ總裁議定參與之三職ヲ置レ萬機可爲行候神武
 創業之始ニ原ツキ縉紳武辨堂上地下ノ別ナク至當ノ公議
 ナ竭シ天下ト休戚ヲ同ク可被遊叡慮ニ付各勉勵舊來驕惰
 ノ汚習ヲ洗ヒ皇國ノ爲メ忠誠ヲ可盡太政官始追々可被爲
 興候間其旨可心得居候朝廷禮式追々御改正可被爲在候得
 共先攝籙門流之儀被止候舊弊御一洗ニ付言路被洞開候間
 見込有之向者不拘貴賤無忌憚可致献言且人才登庸第一之
 御急務ニ候故心當リ之仁有之候ハ、早々言上可有之云々
 ト又御宸翰ノ約ニ云ク近來宇内大ニ開ケ各國四方ニ相雄

○憲法ノ由來

飛スル時ニ當リ獨我國ノミ世界ノ形勢ニウツク舊習ヲ固守シ一新ノ効ヲハカラス朕徒ニ九重中ニ安居シ一日ノ安キヲ倫ニ百年ノ憂ヲ忘ル、トギハ遂ニ各國ノ凌侮ヲ受ケ上ハ列聖ヲ辱シメ奉リ下ハ億兆ヲ苦シメノ事ヲ恐ル汝億兆舊來ノ陋習ニ慣レ尊重ノミヲ朝廷ノ事トナシ神州ノ危急ヲシラス朕一タヒ足ヲ舉レハ非常ニ驚キ種々ノ疑惑ヲ生シ萬口紛紜トシテ朕カ志ヲナサ、ラシムル時ハ是朕ヲシテ君タル道ヲ失ハシムルノミナラス從テ列祖ノ天下ヲ失ハシムル也汝億兆能々朕カ志ヲ體認シ相率テ私見ヲ去リ公議ヲ採リ朕カ業ヲ助テ神州ヲ保全シ列聖ノ神靈ヲ慰メシメハ生前ノ幸甚ナラント

又慶應四年戊辰三月十四日ニ於テ五個條ノ御誓文ヲ發セ

ラル其文ニ云ク(此年九月八日明治ト改元アリ故ニ慶應四年ハ即チ明治元年ナリ)

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
 - 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
 - 一 官武一途庶民ニ至迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦カラシメンコトヲ要ス
 - 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
 - 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
- 我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ
- 以上ハ即チ憲法ノ由來ニシテ而シテ實ニ皆聖上ノ叡慮ニ

○憲法ノ由來

出ルモノナリ之ヲ歐洲諸國ニ徵スルニ亦其例アルヲ見ス
 何レノ國ニ於テモ憲法ヲ制定スルノ因源ハ皆下ニ在リ其
 甚シキニ至テハ或ハ血ヲ濺クニ至ル然ルニ我國ハ之ニ異
 ナリテ其因源ハ上ニ在テ之ヲ制定頒布セラル、ニ當テヤ
 未タ之ヲ知ラサルニ上下皆相賀慶シ聖上ノ萬歲ヲ祝シ國
 家ノ安寧ヲ祝セサルハナカリシナリ已ニ其因源ニシテ如
 此シ其結果モ亦豈如此クナラサルヘケンヤ天無私覆。地無
 私載。日月無私照。ト雖モ日月出矣而燭火不息。時雨降矣而猶
 浸灌。然レハ其於光澤也。不亦難勞乎。且ツ天地ノ大ナルヤ人
 猶ホ憾ムル所アリ風雨寒暑ノ變アルカ故ナリ若シ此理ヲ
 察セスハ因源ト結果ト正ニ相反スルニ至ルヘシ豈畏レテ
 而シテ省ミサルヘケンヤ之ヲ要スルニ君臣ノ義ヲシテ全

カラシムルニ在リ而シテ其義ヲ全カラシメントスル務テ
 私ヲ去リ公ニ就クニ在ルノミ
 然レモ何チ公トイヒ何チ私トイヒ又何チ義トイヒ不義ト
 イフヤ得テ而シテ知ルヘカラス人各其見ル所チ異ニス故
 ニ曰舟行テ而岸移。雲駛テ而月運。ト實ニ黃疸者ハ非黃ノ物ヲ見
 テ黃色ト徹ス古憲法ニ曰ク人皆有心。心各有執。彼是則我非。
 我是則彼非。我必非。彼必非。愚。共是凡夫耳。是非之理。誰能可
 定。ト故ニ私ヲ去リ公ニ就キ是非ノ理ヲ定メント欲スル必
 スヤ其方法ナカルヘカラス之ヲ公議輿論ニ問フノミ國會
 ハ即チ其方法ナリ

第五章 日本ニ特別ナル君臣ノ關係

純理ヨリ論スレハ天下ハ實ニ天下ノ天下ニシテ將相素ト

○日本ニ特別ナル君臣ノ關係

ヨリ其種アルニアラス君臣ハ即チ義ニ由テ生ス然レ我
 國々初ハ先已ニ開説シタルカ如ク國土山川草木群神蒼生
 ナ舉ケテ皆諸冊ニ尊ノ化生セラレシ所ナラサルハナク而
 シテ其聖子神孫ノ此國ヲ統治セラル、茲ニ二千五百有餘
 年ニ至ルカ如キ眞ニ人意ノ外ニ出ルモノアリ故ニ日本ニ
 在テハ實ニ普天ノ下王土ニアラサルハナク率土ノ濱王臣
 ニアラサルハナシ臣民ノ姓ハ之ヲ要スルニ三別ニ過キス
 皇別神別蕃別是レナリ皇別ハ天皇ノ裔ニシテ源氏平氏ノ
 如ク神別ハ上世神明ノ胄シテ藤原氏大江氏ノ如ク蕃別ハ
 外人ノ裔ニシテ秦氏多々良氏ノ如シ故ニ邦人ハ皇裔ニア
 ラサレハ則チ神裔ニシテ神裔ニアラサレハ蕃裔ナリ而シ
 テ其蕃裔ハ皆我ニ歸化服従シタル者ニシテ只其後裔ノ多

カラサルノミナラス這ハ是レ受容シテ邦人トシ保護スル
 ニ外ナラサル者ナリ然リ而シテ皇室ニハ姓ナク又氏ナシ
 其姓氏ナキハ即チ是レ皇神ノ裔ニシテ一系萬世此國ニ君
 臨セラルヘクシテ他ニ匹スヘキ者ナキカ故ナリ故ニ又田
 宅ノ如キモ上ニ與奪ノ權アリシナリ田宅私有ノ權利ヲ公
 認セラレタルハ實ニ明治四年地券發行ノ時ニ在リ其經歷
 スル所已ニ斯ノ如クナルヲ以テ我國君臣ノ分ニ關シテハ
 或ハ純粹ノ理論ニ依リ或ハ他國ノ事例ヲ引テ論スヘカラ
 サルモノアリ余カ所謂ル日本ニ特別ナル君臣ノ關係トハ
 之ヲイフナリ

○日本ニ特別ナル君臣ノ關係

大日本帝國憲法

憲法ヲ發布セラレタル所以並ニ其發布セラレタル憲法ノ精神其執行ノ期日等ハ勅語告文及ヒ其上諭ニ徴シテ之ヲ知ルヘシ故ニ先ツ此ニ其全文ヲ掲ク

憲法發布勅語

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス
惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト並ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民

○憲法發布勅語

即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ
意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎順シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝
國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシ
ムルヲ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハ
サルナリ

告文

皇朕レ謹ミ畏ミ

皇祖

皇宗ツ神靈ニ詔ケ白サク皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟
神ノ寶祚ヲ承繼シ舊圖ヲ保持シテ敢テ失墜スルコト無シ
願ミルニ世局ノ進運ニ膺リ人文ヲ發達ニ隨ヒ宜ク
皇祖

皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ内ハ以
テ子孫ノ率由スル所ト爲シ外ハ以テ臣民翼賛ノ道ヲ廣ク
永遠ニ遵行セシメ益々國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ慶
福ヲ増進スヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス惟フニ此レ
皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナ
ラス而シテ朕カ躬ニ逮テ時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ
洵ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ皇朕レ仰テ

○告文

皇祖

皇宗及

皇考ノ神祐ヲ禱リ併セテ朕カ現在及將來ニ臣民ニ率先シ此ノ憲章ヲ履行シテ愆ヲサラムコトヲ誓フ庶幾クハ神靈此レヲ鑒ミタマヘ

上諭

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其ノ廉福ヲ増進シ其ノ懿德良能ヲ發達セシメムコトヲ願ヒ又其ノ翼賛ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セムコトヲ望ミ乃チ明治十四年十月十四日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕カ後嗣及

臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム

國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ

朕ハ我カ臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムヘキコトヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開會ノ時ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜チ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼續ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ

○上諭

議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ

朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任スヘシ朕カ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ

御名 御璽

明治二十二年二月十一日

余ハ此述義ニ於テハ憲法ノ條章ヲ逐フテ其趣旨ヲ說述スルコトナシ是レ其事類ニ就テ其要領ヲ得ノコトヲ欲スレハナリ條章ヲ逐フテ說述スルハ細ニ似テ實ハ疎ナリ而シテ終ニ其要領ハ之ヲ得ル能ハサルニ至ル

第一章 憲法ノ解

憲法トハ何ヤ曰ク憲法ハ一國ヲ建立スル所以ノ法ナリ佛語英語並ニ之ヲコンチチヨントイフコトナリ余ハ建立シ築造スルノ謂ニシテ即チ邦國ヲ建立シ一大法人ヲ構成スルヲイフ余カ嘗テ之ヲ譯シテ建國法トイヒシハ此カ爲メナリ故ニ大日本帝國憲法ハ即チ一大法人タル大日本帝國ヲ構成シ建立スル所以ノ法ナリ故ニ此憲法タル只臣民ノ遵守スヘキノミナラス君上モ亦率由セサルヘカラサルモノナリ告文ニ曰ク朕カ現在及將來ノ臣民ニ率先シ此ノ憲章ヲ履行シテ愆ヲサラムコトヲ誓フト又上諭ニ曰ク朕及朕カ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ヲサルヘシト又憲法第四條ニ曰ク此ノ憲法ノ

○憲法ノ解

條規ニ依リ之ヲ行フト之ヲ不磨ノ大典トイフハ是レカ爲メナリ

字書ニ云ク懸レ法示^ス人^ニ曰^フ憲^ニ从^ヒ害^省从^ヒ心^ニ从^レ目^ニ觀^レ於^ニ法^象使^ム人^ノ曉然知^リ不善之害^ヲ接^シ於^レ目^ニ怵^レ於^レ心^ニ凜^乎不^レ可^レ犯^ス也^ト又云ク法ハ偏也[○]偏^テ而^レ使^ル有^レ所^レ限^ル也^ト故ニ憲法ノ字義ノミニ就テハ人寸^ノうち^ノち^ノ玄^ノよん^ノ意見^ニエ^スト雖モ其全章ニ就キ尙ホ其由來スル所ニ就テ之ヲ觀レハ則チ人寸^ノうち^ノち^ノ玄^ノよん^ノタルヲ知ルヘキナリ

一國ヲ建立スルハ猶ホ一家ヲ建立スルカ如シ一家ヲ建立スルニハ必ス棟梁アリ柱石アリ其他緊要ノ材料ナカルヘカラズ一國ヲ建立スル豈棟梁柱石其他ノ材料ナキヲ得ンヤ邦國ハ素ト人衆ノ團結ヨリ成立スルモノニシテ其團結

ナシテ善ク團結セシメントスルキハ必ス之ヲ統治スル者ナキ能ハス之ヲ統治スル者ハ即チ元首ナリ君長ナリ已ニ君長アリト雖モ君長獨能ク人衆ヲ統治スルヲ得ンヤ必ス之ヲ輔翼シ其他萬事ニ當ル者ナキコトヲ得ス之ヲ要スルニ邦國ノ機關ト爲ル者アリテ而シテ後其團結ヲ全フスルコトヲ得憲法ハ即チ此機關ト爲リ其職務ヲ行フ所以ノ章程ヲ示スモノナリ而シテ我國ニ於テハ萬機ヲ統ヘ其元首タルハ天皇ニ在リ

第二章 天皇

憲法第一條ニ云ク大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス其第四條ニ云ク天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フト此兩條ノ精神ハ告文ト

○天皇

勅語トニ依テ之ヲ知ルヘシ告文ニ云ク天壤無窮ノ宏謨ニ
循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ云々ト勅語ニ云ク朕カ祖宗ニ承
クルノ大權ニ依リ云々ト所謂ル天壤無窮ノ宏謨ハ即チ天
照太神ノ神勅ナリ日葦原千五百秋之瑞穗國。是吾子孫可王
之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆。當與天壤無窮者矣
ト。所謂ル大權モ亦此治焉ノ權ニ外ナラシヤ

第二條ニ云ク皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫
之ヲ繼承スト古典ヲ按スルニ或ハ天照太神ヲ陰神ナリト
言フ者アリ且ツ推古、皇極、齊明、持統、元明、元正、孝謙、稱徳、本院
ノ九天皇ハ皆女天皇ニシテ而シテ其中ニ就テ齊明天皇ハ
皇極天皇ノ重祚ニシテ稱徳天皇ハ孝謙天皇ノ重祚ナリ夫
レ如此ク古昔ハ皇女ニシテ大統ヲ繼承セラレタルノミナ

ラス或ハ重祚セラレ、コトアリタルニ今之ヲ改メテ皇男
ニ限ラレタルハ何ヤ歐洲諸國ノ例ヲ按スルニ概シテ皆系
統ノ男子ヲシテ君位ヲ繼承セシムルコト、爲シタリ佛國
ニテモ千八百五十二年十一月七日ノ元老院決定書第二條
ニハ帝位ハ路易拿破崙保那巴ノ直系且ツ適法ノ身屬ニ於
テ永世婦女及ヒ其身屬ヲ除キ初生ノ順序ヲ以テ男ヨリ男
ニ世襲スヘシトアリ伊太利獨逸ノ如キモ皆亦如此クナリ
トイフ余思フニ第一ハ他姓ヲ交ユルノ恐アルカ故ナルヘ
シ男女精ヲ合ハセ陰陽相和シテ胚胎スト雖モ陽ハ陽ニ傳
ヘ陰ハ陰ニ傳フテ自ラ彼此互ニ相混スルコトナシトイフ
故ニ女ヲシテ其統ヲ繼カシムルハ男系ハ此ニ絶スヘキ
ナリ第二ハ女ハ内ヲ治メ男ハ外ヲ治ムルハ當然ノ順序ニ

○天皇

シテ古來何レノ國ニ於テモ然ラサルハナシ女ニシテ徵兵
 タルヲ得サルニ於テハ女ニシテ將帥タルヲ得サルハ辨ナ
 俟タス國君ハ陸海軍ヲ統帥スル者ナリ我國ニ於テモ亦然
 リ此等ハ是レ皇男子孫ニ限リ大統領ヲ繼承セラル、所以ナ
 ルヘシ

皇男子孫ノ皇位ヲ繼承セラルハ皇室典範ノ定ムル所ニ依
 ル而シテ其皇位ヲ繼承セラル、ノ順序タル最大ノ關係ヲ
 有スル者ニシテ若シ其順序ヲ誤ルニ於テハ只皇統ノ紊亂
 ナ來スノミナラズ實ニ國家ノ紛争ヲ生スル所以ナリ之ヲ
 古來ノ史傳ニ徵スルニ其例勘カラサルナリ故ニ普魯西和
 蘭西班牙葡萄牙佛蘭西等ハ皆憲法ニ君位繼承ノコトヲ明
 示セリ我國ニ於テハ憲法ニ之ヲ示サレヌシテ別ニ皇室典

範ヲ設ケテ之ヲ定メラレタリ而シテ其皇室典範ハ官報ニ
 登載ナキヲ以テ公然引援スルヲ得ヘキモノニアラスト雖
 モ今幸ニ宮内省ノ允準ヲ得タルヲ以テ先ツ此ニ其全文ヲ
 掲ケ尋テ憲法中皇室ニ係ル條章ニ於テハ之ヲ引援シテ其
 關係ヲ示スヘシ然レモ皇室典範ハ素ト官報ニ登載ナキモ
 ノナレハ臣民ニ在テハ參考スルニ過キスシテ他ノ公布セ
 ラレタル法律勅令ト同一視スヘキモノニアラサルナリ(明
 治二十二年二月二十六日請願同年三月二日差支ナキ旨宮
 内省ヨリ達セラル)

上諭

天佑ヲ享有シタル我日本帝國ノ寶祚ハ萬世一系歷代繼承
 シ以テ朕カ躬ニ至ル惟フニ祖宗肇國ノ初大憲一タヒ定マ

○天皇

皇室典範

リ昭ナルルコト日星ノ如シ今ノ時ニ當リ宜ク遺訓ヲ明徴ニシ皇家ノ成典ヲ制立シ以テ丕基ヲ永遠ニ鞏固ニスヘシ茲ニ樞密顧問ノ諮詢ヲ經皇室典範ヲ裁定シ朕カ後嗣及子孫ヲシテ遵守スル所アラシム

御名 御璽

明治二十二年二月十一日

皇室典範

第一章 皇位繼承

第一條 大日本國皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ繼承ス

第二條 皇位ハ皇長子ニ傳フ

第三條 皇長子在ラサルトキハ皇長孫ニ傳フ皇長子及其

ノ子孫皆在ラサルトキハ皇次子及其ノ子孫ニ傳フ以下皆之ニ例ス

第四條 皇子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ嫡出ヲ先ニス皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ル

第五條 皇子孫皆在ラサルトキハ皇兄弟及其ノ子孫ニ傳フ

第六條 皇兄弟及其ノ子孫皆在ラサルトキハ皇伯叔父及其ノ子孫ニ傳フ

第七條 皇伯叔父及其ノ子孫皆在ラサルトキハ其ノ以上ニ於テ最近親ノ皇族ニ傳フ

第八條 皇兄弟以上ハ同等内ニ於テ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニシ長ヲ先ニシ幼ヲ後ニス

第九條 皇嗣精神若ハ身体ノ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ

○天皇 皇室典範

事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ前數條ニ依リ繼承ノ順序ヲ換フルコトヲ得

第二章 踐祚即位

第十條 天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承シ

第十一條 即位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

第十二條 踐祚ノ後元號ヲ建テ一世ノ間ニ再ヒ改メサルコト明治元年ノ定制ニ從フ

第三章 成年立后立太子

第十三條 天皇及皇太子皇太孫ハ滿十八年ヲ以テ成年トス

第十四條 前條ノ外ノ皇族ハ滿二十年ヲ以テ成年トス

第十五條 儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス皇太子在ラサルトキハ儲嗣タル皇孫ヲ皇太孫トス

第十六條 皇后皇太子皇太孫ヲ立ツルトキハ詔書ヲ以テ之ヲ公布ス

第四章 敬稱

第十七條 天皇、太皇太后、皇太后、皇后ノ敬稱ハ陛下トス

第十八條 皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王ノ敬稱ハ殿下トス

第五章 攝政

第十九條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ攝政ヲ置シ天皇久キニ亘ルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルトキハ皇族會議及ヒ樞密顧問ノ議ヲ經テ攝政ヲ置シ

○天皇 皇室典範

第二十條 攝政ハ成年ニ達シタル皇太子又ハ皇太孫之ニ任ス

第二十一條 皇太子皇太孫在ラサルカ又ハ未タ成年ニ達セサルトキハ左ノ順序ニ依リ攝政ニ任ス

第一 親王及王

第二 皇后

第三 皇太后

第四 太皇太后

第五 內親王及女王

第二十二條 皇族男子ノ攝政ニ任スルハ皇位繼承ノ順序ニ從フ其ノ女子ニ於ルモ亦之ニ準ス

第二十三條 皇族女子ノ攝政ニ任スルハ其ノ配偶アラサル者ニ限ル

ル者ニ限ル

第二十四條 最近親ノ皇族未タ成年ニ達セサルカ又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ他ノ皇族攝政ニ任シタルトキハ後來

最近親ノ皇族成年ニ達シ又ハ其事故既ニ除クト雖皇太子及皇太孫ニ對スルノ外其ノ任ヲ讓ルコトナシ

第二十五條 攝政又ハ攝政タルヘキ者精神若ハ身體ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及ヒ樞密顧問ノ議ヲ經テ其ノ順序ヲ換フルコトヲ得

第六章 太傅

第二十六條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ太傅ヲ置キ保育ヲ掌ラシム

第二十七條 先帝遺命ヲ以テ太傅ヲ任セカリシトキハ攝

○天皇 皇室典範

政ヨリ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ之ヲ選任ス

第二十八條 太傅ハ攝政及其ノ子孫之ニ任スルコトヲ得ス

第二十九條 攝政ハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シタル後

ニ非サレハ太傅ヲ退職セシムルコトヲ得ス

第七章 皇族

第三十條 皇族ト稱フルハ太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇

太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王、ヲ
謂フ

第三十一條 皇子ヨリ皇玄孫ニ至ル迄ハ男ヲ親王、女ヲ內

親王トシ五世以下ハ男ヲ王、女ヲ女王トス

第三十二條 天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承ルトキハ皇兄弟

姉妹ノ王、女王タル者ニ特ニ親王、內親王ノ號ヲ宣賜ス

第三十三條 皇族ノ誕生命名婚嫁薨去ハ宮内大臣之ヲ公

告ス

第三十四條 皇統譜及ヒ前條ニ關ル記錄ハ圖書寮ニ於テ

尙藏ス

第三十五條 皇族ハ天皇之ヲ監督ス

第三十六條 攝政在任ノ時ハ前條ノ事ヲ攝行ス

第三十七條 皇族男女幼年ニシテ父ナキ者ハ宮内ノ官僚

ニ命シ保育ヲ掌ラシム時宜ニ依リ天皇ハ其ノ父母ノ選

舉セル後見人ヲ認可シ又ハ之ヲ勅選スヘシ

第三十八條 皇族ノ後見人ハ成年以上ノ皇族ニ限ル

第三十九條 皇族ノ婚嫁ハ同族又ハ勅旨ニ由リ特ニ認許

セラレタル華族ニ限ル

第四十條 皇族ノ婚嫁ハ勅詔ニ由ル

第四十一條 皇族ノ婚嫁ヲ許可スルノ勅書ハ宮内大臣之

ニ副署ス

第四十二條 皇族ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

第四十三條 皇族國疆ノ外ニ旅行セムトスルトキハ勅詔

ヲ請フヘシ

第四十四條 皇族女子ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ皇族ノ列ニ

在ラス但シ特旨ニ依リ仍内親王女王ノ稱ヲ有セシムル

コトアルヘシ

第八章 世傳御料

第四十五條 土地物件ノ世傳御料ト定メタルモノハ分割

讓與スルコトヲ得ス

第四十六條 世傳御料ニ編入スル土地物件ハ樞密顧問ニ

諮詢シ勅書ヲ以テ之ヲ定メ宮内大臣之ヲ公告ス

第九章 皇室經費

第四十七條 皇室諸般ノ經費ハ特ニ常額ヲ定メ國庫ヨリ

支出セシム

第四十八條 皇室經費ノ豫算、決算、檢査及其ノ他ノ規則ハ

皇室會計法ノ定ムル所ニ依ル

第十章 皇族訴訟及ヒ懲戒

第四十九條 皇族相互ノ民事ノ訴訟ハ勅旨ニ依リ宮内省

ニ於テ裁判員ヲ命シ裁判セシメ勅裁ヲ經テ之ヲ執行ス

第五十條 人民ヨリ皇族ニ對スル民事ノ訴訟ハ東京控訴

院ニ於テ之ヲ裁判ス但シ皇族ハ代人ヲ以テ訴訟ニ當ラ

シメ自ラ訟廷ニ出ルヲ要セズ

第五十一條 皇族ハ勅許ヲ得ルニ非サレハ勾引シ又ハ裁判所ニ召喚スルコトヲ得ズ

第五十二條 皇族其品位ヲ辱ムルノ所行アリ又ハ皇室ニ對シ忠順ヲ缺クトキハ勅旨ヲ以テ之ヲ懲戒シ其ノ重キ者ハ皇族特權ノ一部又ハ全部ヲ停止シ若ハ剝奪スヘシ

第五十三條 皇族蕩産ノ所行アルトキハ勅旨ヲ以テ治産ノ禁ヲ宣告シ其ノ管財者ヲ任スヘシ

第五十四條 前二條ハ皇族會議ニ諮詢シタル後之ヲ勅裁ス

第十一章 皇族會議

第五十五條 皇族會議ハ成年以上ノ皇族男子ヲ以テ組織

シ内大臣、樞密院議長、宮内大臣、司法大臣、大審院長ヲ以テ參列セシム

第五十六條 天皇ハ皇族會議ニ親臨シ又ハ皇族中ノ一員ニ命シテ議長タラシム

第十二章 補則

第五十七條 現在ノ皇族五世以下親王ノ號ヲ宣賜シタル者ハ舊ニ依ル

第五十八條 皇位繼承ノ順序ハ總テ實系ニ依ル現在皇養子、皇猶子又ハ他ノ繼嗣タルノ故ヲ以テ之ヲ混スルコトナシ

第五十九條 親王、内親王、王、女王、ノ品位ハ之ヲ廢ス

○天皇 皇室典範

第六十條 親王ノ家格及ヒ其他此典範ニ牴觸スル例規ハ
總テ之ヲ廢ス

第六十一條 皇族ノ財産、歳費及諸規則ハ別ニ之ヲ定ムヘ
シ

第六十二條 將來此典範ノ條項ヲ改正シ又ハ増補スヘキ
ノ必要アルニ當テハ皇族會議及ヒ樞密顧問ニ諮詢シテ
之ヲ勅定スヘシ

皇室典範第二條第三條ニ依ルニ皇位ハ皇長子ニ傳ヘ皇長
子在ラサルトキハ皇長孫ニ傳フ皇長子及皇長孫皆在ラサ
ルトキハ皇次子及其ノ子孫ニ傳フ以下皆此例ニ依ル而シ
テ第十條ニ依ルニ天皇崩スルトキハ皇嗣ハ當然踐祚シ神
器ヲ承ケ即位ノ禮ト相關セサルナリ故ニ即位ノ禮ヲ行ハ

レスト雖モ天皇ノ崩御ノミニ由リ皇位ハ直チニ皇嗣ニ移
轉ス之ヲ踐祚トイフ恰モ一私人ノ死去シテ其相續ノ直チ
ニ嗣子ニ移ルト一般ナリ且ツ即位ノ禮ノ如キハ古來其已
ニ缺如セシコト久シカリシナリ近世之ヲ舉行セラレシハ
實ニ今上陛下ニ始マル亦以テ踐祚ト即位ノ禮ト相關セサ
ルヲ知ルヘシ

又天皇ノ成年ヲ滿十八年ト爲ス歐洲諸國モ概シテ皆如此
シ我國ニテ人民ノ成年ハ滿二十年ニシテ皇族ノ成年モ亦
滿二十年ナリ(明治九年四月一日第四十一號布告皇室典範
第十四條)如此ク君上ト人臣トノ成年ニ差別アルハ左ノ二
個ノ事由ニ基クコトナルヘシ即チ一ハ治世上ノ必要ニ由
リ一ハ特別ナル教育ニ由ルコトナルヘシ而シテ此二事ハ

○天皇

周公ト成王トノ關係ニ徴シテ知ルヘキナリ所謂ル治世上ノ必要トハ君主ノ親政ヲ要スルモノニシテ夫ノ垂簾聽政ノ如キハ固トヨリ萬巳ムヲ得サルニ出ルモノニシテ而シテ其間ニ於テ種々ノ弊害ヲ生セシコトハ古來往々是レアリ又他ニ攝政ヲ置クモ同ク種々ノ弊害ヲ生シ終ニ國家ノ亂階タリシコトモ亦古來多ク見ル所ナリ周公ノ聖ナルモ尙ホ管蔡ノ亂アリ又召公モ已ニ之ヲ疑ヒシナリ况ンヤ周公ヲサル者ノ政ヲ攝シ國ニ當ルニ於テチヤ是レ君主ノ親政ヲ要スル所以ナリ又特別ナル教育モ周公カ成王ヲ教導輔佐セシカ如クニシテ其德其才ヲ養フノ方法備具スルチイフ故ニ君主ハ早ク世故ニ熟達シ事理ニ通曉スルコトヲ得是レ皇室典範ニモ太傅アル所以ナリ皇子ト雖モ其教

養ノ完備スル尙ホ尋常ノ臣民ト日チ同クシテ論スヘカラサルモノアリ况ンヤ天皇ニ於テチヤ故ニ歐洲諸國ニ於テモ君主ハ臣人ヨリモ年少ニシテ成年タル者トス佛國ニテハ千二百七十年ニハ太子ノ成年ヲ滿十四年ト爲シ千三百七十四年ニハ君主ノ成年ヲ十三年一日ト爲シ千七百九十年ノ憲法ニ至テ君主ノ成年ヲ滿十八年ト爲シ第二帝國千八百五十六年元老院決定書ニ於テモ亦滿十八年ト爲シタリ尙ホ千八百六十二年代ニ在テ歐洲諸國ノ君主ノ成年ヲ定ムル所ヲ見ルニ英國魯國ヲ除クノ外ハ皆滿十八年ト爲シタリ英國ニテハ法律上國王ニ幼年ナシト推測シ假令ヒ實際幼君タリト雖モ王位ニ登レハ則チ成年ナリトセリ然レハ幼君ノ王位ニ即クキハ議院ニテ攝政ヲ命シ幼君十

八年ニ至ル迄ハ之ヲ輔佐セシム又女王ノ位ニ即クキハ其十六年ニ至ル迄ヲ攝政ヲ命ス然レモ此攝政ヲ命スルニ付テハ必ス其幼君タル王子王女ノ承諾ヲ要スルコト、シ又攝政ハ幼君ノ意思ヲ束縛スルコトヲ得ストセリ故ニ攝政ナク又攝政ノ意思ニ反シテ幼君國政ヲ行フモ法律上之ヲ正當ノモノナリトス然レモ幼君即位ノ時ハ通例法律ニテ諸般ノ規則ヲ設クトイフ又魯國ニテハ滿十六年ヲ以テ成年ト爲シ十六年未滿ノ幼君ニハ攝政ヲ置ク土耳兒埃及ニテハ君主ノ子女中ニテ年長ノ者位ニ即キ成年幼年ノ別ナシトイフ

天皇未タ成年ニ達セサルトキハ必ス攝政ヲ置ク又天皇久シキニ渉ルノ故障ニ依リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルトキハ皇族會議及ヒ樞密顧問ノ議ヲ經テ攝政ヲ置ク天皇ノ大政ヲ親裁スル能ハサルヤ否ヤ攝政ヲ置クヲ必要トスルヤ否ヤノ事實ニ付テハ皇族會議ト樞密顧問ノ決議ヲ要ス

ト雖モ已ニ攝政ヲ置クヲ必要トスルニ決定スルトキハ成年ノ皇太子又ハ皇太孫當然攝政ニ任ス皇太子皇太孫在ラサルトキ又ハ其成年ナラサルトキハ左ノ順序ニ依リ攝政ニ任ス

- 第一 親王及ヒ王
- 第一 皇后
- 第三 皇太后
- 第四 太皇太后
- 第五 內親王及ヒ女王

○天皇

攝政ノ順序モ亦男ヲ先ニシ女ヲ後ニスルモノニシテ而シテ皇族男子即チ親王及ヒ王ノ攝政ニ任スルハ皇位繼承ノ順序ニ從フ其内親王女王ニ於ケルモ亦之ニ同シ又皇族女子ノ攝政ニ任スルハ其配偶ナキ者ニ限ル皇后皇太后太皇太后ノ皇族タルハ勿論ニシテ皇后ニ配偶アリ即チ天皇アルハ亦勿論ナリ皇太后太皇太后ニ配偶ナキモ亦論ヲ俟タズ古昔ハ太上天皇アリシカ故ニ皇太后等配偶ナキニ限ラサルヘシト雖モ今ハ憲法皇室典範共ニ太上天皇ノコト見エサレハ皇太后等ニ配偶ナキコト自ラ知ルヘキナリ故ニ所謂ル皇族女子ハ即チ内親王及ヒ女王ヲ指スモノトス又最近親ノ皇族未タ成年ニ達セサルカ又ハ其他ノ事故ニ依リ他ノ皇族攝政ニ任シタルトキハ後來最近親ノ皇族成年

ニ達シ又ハ其事故已ニ除クト雖モ皇太子及ヒ皇太孫ニ對スルノ外其任ヲ讓ルコトナシ又攝政若クハ攝政タルヘキ者精神若クハ身體ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及ヒ樞密顧問ノ議ヲ經テ其順序ヲ變更スルコトヲ得(皇室典範第十九條以下)

以上皇室典範ニ定ムル所ニ依テ攝政ヲ置キ而シテ其攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權即チ統治ノ權ヲ行フ故ニ攝政ノ行フ所ハ即チ天皇ノ行フ所タルノミナラス反テ幼冲ノ天皇ハ大政ヲ親ラセラルヘキニアラストス英國ノ例ハ之ニ異ナリ思フニ英國ハ攝政ヲシテ無用ノモノタラシムニ似ル若シ攝政ノ意思ニ反シテ國王親政スルヲ得ハ攝政ハ夫レ將タ何ノ用ヲカ是レ爲サン我憲法ノ定ムル所ハ最其宜ヲ

得タルモノナリトス(憲法第十七條)

皇室典範ハ官報ニ登載ナシト雖モ國運ノ關スル所ニシテ其至重ノモノタルハ論ヲ俟タス故ニ皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間ハ之ヲ變更スルコトヲ得ストシ特ニ之ヲ憲法第七十五條ニ明示セラレタリ然レモ固ト臣民ニ直接ノ關係アルモノニアラサルヲ以テ皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セサルナリ思フニ官報ニ登載ナキモ蓋シ之レカ爲メナルヘシ故ニ皇室典範ヲ以テ憲法ヲ變更スルヲ許サ、ルノミナラス憲法ヲ以テ皇室典範ヲ變更スルコトモ亦許サ、ルナリ憲法中ニ皇室典範ニ關係スルノ條規アルハ憲法ハ國民ノ遵守スルノミナラス君上モ亦遵守セラルヘキモノナルヲ以テナリ(憲法第七十四條第七十五條)

又皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出ス而シテ現在ノ定額ハ三百萬圓ニシテ(明治二十二年度各廳經費要求書提要ニ皇室ニ屬スル經費ハ明治二十一年十月二十四日ノ閣裁ニ據リ經常費三百萬圓ト定メテ之ヲ編入ストアリ)此定額ニ付テハ爾後帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要セズ是レ皇室ノ經費ハ他官廳ノ經費ト異ナリテ皇室内ノ私費ニ係ルヲ以テナリ然レモ其國庫ヨリ支出スルモノナルヲ以テ將來増額ヲ要スル場合ニ於テハ帝國議會ノ協賛ヲ經サルヘカラス西洋諸帝王國ノ例モ亦皆如此シトイフ

(憲法第六十六條)

憲法第三條ニ曰ク天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラスト佛國ニテハ千八百十四年千八百三十年ノ法律ニ於テハ國王ノ

○天皇

身ハ神聖ニシテ侵スヘカラスルモノトセリ然レモ千八百五十二年ノ憲法ニテハ君主ニ責任アリトセリ這ハ是レ那破崙第三世カ當初共和大統領ニシテ轉シテ皇帝ト爲リタルカ故ナリ共和大統領ノ責任ヲ負フテ國ニ當ルハ論ヲ俟タス其他歐洲諸國ニテ耶蘇舊教ヲ奉スル國ニ在テハ君主ハ神聖ニシテ侵スヘカラストシ耶蘇新教ヲ奉スル國ニ在テハ君主ハ侮辱スヘカラストシ即チ伊太利西班牙葡萄牙澳地利等ノ國ハ神聖ニシテ侵スヘカラストイヒ丁抹モ新教ノ一派ヲ國教トスレモ亦神聖ニシテ侵スヘカラストイヒ而シテ普魯西和蘭白耳義等ノ國ニ於テハ侮辱スヘカラストイフノミナリトイフ然レモ其侮辱シ侵犯スヘカラスルニ至テハ一ナリ神聖ノ語ハ佛語ノせいんニ當ルモノニ

シテ此せいん即チ神聖ノ語ニ付テハ宗教上多少ノ論議アルコトナレモ我國ハ教法ノ如何ニ拘ハラズ國ハ即チ神國ト稱シ入ハ即チ神裔ニシテ特ニ天皇ト號ス其神聖タル言ヲ俟タス已ニ之ヲ神聖ナリトス如何ソ侮辱シ侵犯スルヲ得ン侵犯スヘキ神聖ニアラサルナリ是レ實ニ國體ノ然ラシムル所ニシテ他國ノ例ヲ以テ論スヘカラスルモノアリ我天皇ノ神聖ニシテ侵スヘカラスルハ恰モ共和大統領ノ人民ニシテ責任ヲ負フト同一理ニシテ正ニ相表裏スルモノナリ

第三章 三大權ノ分立

三大權トハ立法行法司法ノ三權ヲイフ之ヲ合スレハ則チ統治ノ權ニシテ之ヲ分テハ則チ立法行法司法ノ三權ト爲

○三大權ノ分立

ル天皇ハ統治ノ權ヲ有シ三大權ヲ總攬セラルト雖モ之ヲ行フニ當テハ必ス憲法ノ定ル所ニ依ラレサルヘカラス(憲法第四條)而シテ之ヲ分テ三權ト爲スコトハ歐洲諸國ノ法律ニ徵シ我憲法ニ照シテ明了ナルノミナラス條理ニ於テモ亦必ス如此クナラサルヘカラス若シ然ラスシテ一人ニシテ之ヲ有シ一人ニシテ之ヲ行ハ、專恣ノ處置ナキ能ハサルノミナラス實事ニ於テモ亦爲スヘカラサルコトナリ君主專制ノ國ト雖モ一人ニシテ之ヲ行フニアラズ數多ノ官員ヲシテ之ヲ分掌セシム但之ヲ分掌セシムルニ於テ一定ノ法律ニ依ラスシテ君主ノ專決スル所ニ依ルノミ今日ノ憲法ニ依ルニ我國ハ君主專制政體ニアラスシテ君主立憲政體ナリ且ツ其立憲政體タル君臣ノ義ニ適シ上

下ノ情ニ合シテ而シテ確然清明中庸ヲ得タルモノナリ此憲法ヤ實ニ我國未曾有ノ大典タルノミナラス空前絶後ノ良憲ナリトイフモ過言ニアラサルナリ
 憲法ニ於テ立法行法司法ノ三權分立ヲ認メラレタルノミナラス一權ト雖モ一人ノ專行スル所ニアラサルコトハ憲法第五條ニ天皇ハ帝國議會ノ協贊ヲ以テ立法權ヲ行フトアリ又第三十七條ニ凡テ法律ハ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要ストアルニ徵シテ知ルヘキナリ是レ帝國議會ニ分與スルニ立法權ヲ以テセラレタルナリ又第九條以下ニ法律ヲ執行シ其他行政ニ係ル規則ヲ示サレタルニ依リ又第五十七條ニ於テ司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フトアリ又第五十八條ニ裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲

戒ノ處分ニ由ルノ外其職ヲ免セラル、コトナシトアル等
 ニ依リ之ヲ知ルヘキナリ尙ホ其沿革ニ徴スレハ其事跡最
 明確ナリトス故ニ之ヲ行フ者ハ立法官行法官裁判官ニシ
 テ天皇ハ只之ヲ總攬セラル、ノミ立法權ト裁判權トヲ分
 別シテ且ツ各之ヲ獨立セシメタルハ憲法中ノ最大緊要部
 ニシテ未曾有ノ大典ト稱スル所以モ他アルニアラサルナ
 リ
 往古ニ在テハ政權ヲ分立セシムルコトナク悉ク一處ニ之
 ヲ掌握セラレ隨テ其政體ヤ專制政體ナリ維新ニ至リ明
 治元年閏四月ノ布告ヲ以テ太政官ヲ分ケテ七省ト爲シ立
 法司法行政ノ三權ヲ分掌セシメ政體書ヲ印刷シテ天下ニ
 頒布セラレタリ是レ實ニ三權分掌ヲ明言シタル嚆矢ニシ

テ而シテ其後明治八年四月十四日ニ至リ第五十八號布告
 ニ詔書ヲ添ヘ之ヲ天下ニ公示シ以テ三權分立ノ基礎ヲ立
 定セラレタリ其詔書ニ曰ク朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會
 シ五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム
 幸ニ祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ頼リ以テ今日ノ小康ヲ得タ
 リ願ニ中興日淺ク内治ノ事當ニ振作更張スヘキ者少シト
 セス朕今誓文ノ意ヲ擴充シ茲ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ
 源ヲ廣メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ又地方官ヲ
 召集シ以テ民情ヲ通シ公益ヲ圖リ漸次ニ國家立憲ノ政體
 ヲ立テ汝衆庶ト俱ニ其慶ニ頼ント欲ス汝衆庶或ハ舊ニ泥
 ミ故ニ慣ル、ト莫ク又或ハ進ムニ輕ク爲スニ急ナルト莫
 シ其レ能朕カ旨ヲ體シ翼賛スル所アレト元老院ハ即チ貴

○三權ノ分立

族院ノ本ニシテ而シテ地方官會議ハ即チ衆議院ノ初ナリ
 此詔ヤ徒三權分立ノ基礎タルノミナラス又立憲政體ノ基
 礎タルモノナリ漸進ハ事物當然ノ順序ニシテ聖旨モ亦實
 ニ漸進ニ在リ急進輕爲ハ事物當然ノ順序ニ戻ルヲ以テ機
 ニ臨ミ變ニ應スルニ當テハ或ハ其効ナキニアラスト雖モ
 常ニ據ルヘキノ順序ニアラス急進ハ躓キ輕爲ハ敗ル

第四章 立法權

第一款 天皇

立法權ハ天皇ト帝國議會トニ在リ且ツ發議ノ權モ亦天皇
 ト議會トニ在リ上諭ニ曰ク將來若シ此ノ憲法ノ或ル條章
 ナ改定スルノ必要ナル時宜チ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼承
 ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ議會ニ付シ云々ト憲法ニシ

テ尙ホ發議ノ權アリ況ンヤ其他チヤ又憲法第三十八條ニ
 曰ク兩議院ハ各法律案ヲ提出スルコトヲ得ト其發議ノ權
 ナ有スルヤ知ルヘキナリ又明治十九年二月二十四日勅令
 第一號公文式第二條ニ曰ク法律勅令ハ內閣ニ於テ起草シ
 又ハ各省大臣案ヲ具ヘテ內閣ニ提出シ總テ內閣總理大臣
 ヨリ上奏裁可ヲ請フト故ニ法律勅令ハ或ハ內閣或ハ主務
 省ニ於テ其案ヲ起草スルモノトス而シテ此個條ハ憲法ニ
 矛盾スル所ナキヲ以テ爾後尙ホ其効力チ有スヘキナリ(憲
 法第七十六條)然レモ上奏スルト否トハ內閣ノ意見ニ在ル
 ナルヘシ憲法ニハ國務大臣ノコト見ニテ總理大臣ノコト
 見エズ且ツ內閣ハ明治十八年十二月二十二日第六十九號
 太政官ノ達ニテ內閣ハ總理大臣及ヒ他諸大臣ニテ組織ス

○立法權 天皇

ル旨ヲ達セフレシノミニテ爾後其職制章程ナケレハ今日
 ニ在テハ只立法上ノ職權ノミナラス其他ノ職權モ尙ホ未
 タ詳ナラサルナリ
 憲法第五條ニ曰ク天皇ハ帝國議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ
 行フト故ニ立法ノ權ハ天皇ニアリト雖モ之ヲ行フニ當テ
 ヤ必ス帝國議會ノ協賛ニ依ラサルヘカラス其協賛ヲ得サ
 レハ以テ法律ト爲スヲ得ス况シヤ之ヲ公布シ執行スルヲ
 得ンヤ然レモ帝國議會ノ協賛可決シタルモノハ即チ法律
 ナリトハイフヘカラス天皇ノ之ヲ裁可セラル、チ待テ此
 ニ初メテ之ヲ法律ト稱スヘシ又已ニ之ヲ法律ト稱スルモ
 尙ホ未タ之ヲ執行シ臣民ヲシテ遵守セシムルヲ得ヌ之ヲ
 遵守セシムルニハ公布ノ命アリ執行ノ命アリ且ツ其執行

期限ヲ經過スルヲ要ス執行期限ハ臣民ヲシテ其法律ヲ周
 知セシムルノ猶豫期限ニシテ此期限ヲ經過スレハ則チ法
 律ヲ周知シタル者ト看做シテ之ヲ執行ス公布執行ノ規則
 ハ明治十九年勅令第一號公文式ニ在リ其第十條ニ云ク凡
 ソ法律命令ハ官報ヲ以テ布告シ官報各府縣廳到達日數ノ
 後七日ヲ以テ施行ノ期限ト爲ス但シ官報到達日數ハ明治
 十六年五月二十六日第十四號布達ニ依ル其第十一條ニ云
 ク天災時變ニ依リ官報到達日數内ニ到達セサルキハ其到
 達ノ翌日ヨリ起算ス其第十二條ニ云ク北海道及ヒ沖繩縣
 ハ官報到達日數ヲ定メス現ニ道廳又ハ縣廳ニ到達シタル
 翌日ヨリ起算ス島地ハ所轄郡役所ニ官報ノ到達シタル翌
 日ヨリ起算ス其第十三條ニ云ク法律命令ノ發布ノ當日ヨ

リ施行セシムルコトヲ要シ又ハ特ニ施行ノ日ヲ掲ケタル
 モノハ第十條第十一條第十二條ノ例ニ依ラスト
 法律ヲ制定スルニハ帝國議會ニ僑賛ヲ要スルハ勿論尙ホ
 必ス裁可アルコトヲ要ス而シテ之ヲ執行スルニハ更ニ公
 布執行ノ命令アルヲ要ス此裁可公布及ヒ執行ノ權ハ天皇
 ニ在リ憲法第六條ニ云ク天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及
 執行ヲ命スト裁可トハ天皇カ法律ヲ裁可セラル、ノ謂ニ
 シテ法律ニ親署シ御璽ヲ鈐スルヲイフ御璽ハ內大臣ノ尙
 藏スル所ニシテ親署ノ後內大臣之ヲ鈐スル公文式第十四條
 第十五條公布ハ從前或ハ布告トイヒ或ハ頒布トイヒシモ
 ノニシテ臣民ニ法律ノ制定セラレタルコトヲ示スルニ
 イフ之ヲ公布スルニハ國務大臣之ニ副署シ年月日ヲ記入

ス(憲法第五十五條公文式第三條明治十九年二月二十六日
 勅令第二號各省官制第四條)從來ハ各省主任ノ事務ニ屬ス
 ルモノハ內閣總理大臣及ヒ主任大臣之ニ副署スルコトト
 定メラレタレトモ憲法ニハ總理大臣ノコト見ユサレハ其施
 行後ニ至ラハ或ハ國務大臣ノ副署ノミナルヘキニ似タリ
 然レモ余ハ尙ホ總理大臣ノ副署ヲ要スルコト、思考ス如
 此ク裁可ト公布トハ別事ナレトモ通常皆是レ同時ニ於テス
 ル事ナリ
 發議ノ權ハ天皇ニ在リト雖モ尙ホ裁可ヲ要ス况ンヤ帝國
 議會モ亦立案ノ權アルニ於テチヤ天皇少發議セラル、所
 ナリト雖モ帝國議會決議ノ結果ニ依リ發議ノ趣旨ト大ニ
 異ナルコトアルヘク其他爾後萬般ノ事情ニ依リ其法律ノ

○立法權 天皇

必要ヲ見サルニ至ルコトアルヘシ如此キ場合ニ於テハ帝國議會ハ可決スト雖モ天皇ハ之ヲ裁可セラレサルヘシ其帝國議會ノ立案ニ係ルモノ、如キハ素トヨリ政府ノ知了スル所ニアラサレハ正ニ政府ト其趣旨ヲ異ニスルモノ是レナキヲ必セス是レ特ニ憲法第六條ノ明文アル所以ナリ如此キ明文ハ歐洲諸國ノ憲法ニモ是レアリト雖モ歐洲諸國ニテハ已ニ國會ニ於テ可決シタル以上ハ之ヲ裁可セサルカ如キハ其實例ニ於テ殆ト是レナシトイフ

議院法第三十二條ニ曰ク兩議院ノ議決ヲ經テ奏上シタル議案ニシテ裁可セラレ、モノハ次ノ會期マテニ公布セラレヘシト故ニ裁可セラレタルモノハ必ス次會マテニ公布セラレヘシ其公布セラレサルモノハ即チ裁可セラレサル

モノナリ裁可ノ有無ハ公布ノ有無ニ依テ之ヲ知ルヘシ特ニ裁可ノ有無ヲ議院若クハ臣民ニ對シテ告知セラレ、コハアラサルヘシ

第二款 帝國議會

憲法第三十三條ニ曰ク帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立スト故ニ貴族院ト衆議院トテ合シテ之ヲ帝國議會ト稱ス所謂ル國會ナルモノ是レナリ此國會タル實ニ輓近臣民ノ必要ナリトシ切望スル所ニシテ亦實ニ我國未曾有ノ大典ニ係ルモノナリ然レモ物皆源アリ今日ニシテ始マリタルモノニアラス其源ハ已ニ維新ノ當時ニ在リ何ソヤ明治元年三月十四日五箇條ノ御誓文是レナリ其文ニ曰ク一廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ一上下心ヲ一ニ

○立法權 帝國議會

シテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ一官武一途庶民ニ至迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦サラシメシヨリ要ス一舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ一知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨト而シテ明治七年五月二日第五十八號達ヲ以テ地方官會議ヲ開キ議院憲法並ニ規則ヲ定メラレ尋テ明治八年六月十四日第百二號達ヲ以テ之ヲ修正セラレタリ其上諭ニ曰ク朕踐祚ノ初神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ漸次ニ之ヲ擴充シ全國人民ノ代議人ヲ召集シ公議輿論ヲ以テ律法ヲ定メ上下協和民情暢達ノ路ヲ開キ全國人民ヲシテ各其業ニ安ンシ以テ國家ノ重

ヲ擔任スヘキノ義務アルヲ知ラシメシヨリナ期望ス故ニ先ツ地方ノ長官ヲ召集シ人民ニ代テ協同公議セシム乃チ議院憲法ヲ示ス各員其レ之ヲ遵守セヨト這ハ是レ議會ノ端緒ヲ開カレタルモノニシテ而シテ明治十四年十月十二日勅諭ニ曰ク朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣キ中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ大政ノ統一ヲ總攬シ又夙ニ立憲ノ政體ヲ建テ後世子孫繼クヘキノ業ヲ爲サントシテ期ス嚮ニ明治八年ニ元老院ヲ設ケ十一年ニ府縣會ヲ開カシム此レ皆漸次基ヲ創メ序ニ循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非サルハ莫シ爾有衆亦朕カ心ヲ諒トセン願ミルニ立國ノ體國各其宜キヲ殊ニス非常ノ事業實ニ輕舉ニ便ナラス我祖我宗照臨シテ上ニ在リ遺烈ヲ揚ケ洪模ヲ弘メ古今ヲ變通シ斷

○立法權 帝國議會

シテ之ヲ行フ責朕カ躬ニ在リ將ニ明治二十三年ヲ期シ議員ヲ召シ國會ヲ開キ以テ朕カ初志ヲ成サントス今在廷臣僚ニ命シ假スニ時日ヲ以テシ經畫ノ責ニ當ラシム其組織權限ニ至テハ朕親ラ衷ヲ裁シ時ニ及テ公布スル所アラント大朕惟フニ人心進ムニ偏シテ時會速ナルヲ競フ浮言相動カシ竟ニ大計ヲ遺ル是レ宜シク今ニ及テ謨訓ヲ明徴シ以テ朝野臣民ニ公示スヘシ若シ仍ホ故サラニ躁急ヲ爭ヒ事變ヲ煽シ國安ヲ害スル者アラハ處スルニ國典ヲ以テスヘシ特ニ茲ニ言明シ爾有衆ニ諭スト帝國議會ハ此勅諭ニ基キ此ニ之ヲ設定セラレタルナリ

帝國議會ハ立法ノ權ヲ有スルカ故ニ凡テ法律ハ其議會ノ協賛ヲ經ルニアラサレハ之ヲ制定スルコトヲ得ズ憲法第

三十七條故ニ帝國議會ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決スルハ勿論尙ホ自ラ法律案ヲ提出スルコトヲ得(憲法第三十八條)此規則タル單ニ帝國議會ニ與フルニ立法ノ權ヲ以テシタルノミナラス發議ノ權ヲモ亦之ニ與ヘタルモノナリ之ヲ佛國千八百五十二年一月十四日ノ憲法ニ比スルニ大差アリ佛國憲法ニテハ發議ノ權ヲ與ヘス故ニ立法議院ハ政府ノ提出シタル法律案ニ付キ其全部ヲ否決スルカ又ハ其幾分ヲ否決シテ其餘分ヲ可決スルニ止マリ敢テ修正スルコトヲ得ス但シ全ク修正スルヲ得サルニハアラサレモ其修正案ニ付テハ先ツ之ヲ政府ノ調査委員ニ提出シ調査委員ニ於テ之ヲ採用スヘキモノナリトスル片ハ立法議院長ヨリ更ニ之ヲ參議院ニ送致シ參議院カ之ヲ採用シタル

○立法權 帝國議會

後ニアラサレハ立法議院ノ會議ニ付スルコトヲ得サルナリ然レモ我憲法第三十八條ニハ明ニ法律案ヲ提出スルコトヲ得トアルノミナラス議院法第二十九條ニモ修正ノ動議ヲ發スル云々トアレハ帝國會議カ修正案ヲ提出スルコトヲ得レヤ知ルヘギナリ之ヲ要スルニ帝國會議ハ法律案ノ全部ヲ可決シ又ハ其全部ヲ否決スルヲ得ヘク又其幾分ヲ可決シ其幾分ヲ否決スルヲ得ヘク尙ホ法律案ニ付キ新ニ之ヲ修正スルヲ得テ他ノ制束ヲ受クルコトナシ其權モ亦大ナラスヤ僅ニ參政ノ權ヲ有スルノミニアラサルナリ我政體ヤ立憲政體トイハソヨリ寧ロ自由政體トイフヘキモノアリ立法ノ權ハ國家ノ大權ナリ古來萬國何レノ君主モ之ヲ他人ニ與フルヲ惜マサルハナシ陛下ハ即チ然ラス

率先シテ此不磨ノ大典ヲ定メ此無上ノ大權ヲ與ヘラル臣民タル者國ノ爲メ君ノ爲メ各其忠貞ヲ竭クサ、ルヘケンヤ

以上ハ帝國議會ノ立法權ヲ有シ立法權ヲ行フノ要領ナリ其細則ニ係ルモノハ議院法ノ處ニ於テ之ヲ論スヘシ

第五章 行法權

第一款 天皇

憲法第六條ハ二様ノ事件ヲ規定シタルモノニシテ其一分ハ立法權ニ屬シ其一分ハ行法權ニ屬スルモノナリ即チ法律ノ裁可ハ立法ニシテ其公布執行ハ行法權ニ屬スルモノナリ佛國ニテハ裁可ト公布ト併セテ立法權ナリトスレモ我憲法ニテハ公布ハ行法權ニ屬スルモノト思フナリ第

○行法權 天皇

六條第一段ニ法律ヲ裁可シトアリテ特ニ其第二段ニ其公布及執行ヲ命ストアレハナリ且ツ道理ニ依テ考フルモ裁可アレハ法律ハ即チ制定セラレタルモノナリトイフヲ得ヘケレハナリ公布ハ法律ノ制定セラレタルコトヲ告知スルニ過キス其告知ナシト雖モ裁可セラレハ即チ法律ハ制定セラレタルモノナリ之ヲ一契約ニ比シテ論セシニ裁可ハ即チ承諾ナリ已ニ之ヲ承諾ナリトスレハ承諾ヨリ生スル結果ハ之ヲ裁可ニモ適用スルヲ得ヘシ先人ノ承諾シタルモノハ後人之ヲ繼續スルノ義務アリ公布ハ承諾ノ告知ニ比スヘク執行ハ契約ノ履行ニ比スヘシ故ニ余ハ公布執行ハ即チ行法權ニ屬スルモノト思考スルナリ而シテ此
行法權タル公布執行ハ天皇ニ屬ス

公布ノ命ハ大臣ニ下タシ執行ノ命ハ人民ニ下タサル、モノナリ其命ヲ受クル者一ハ大臣ニシテ一ハ人民ナリ公布ハ常ニ大臣カ命ヲ奉シテ爲ス所ニシテ公布スルハ即チ大臣ノ事ナリ執行ハ概シテ人民ノ受クルモノニシテ人民ハ其執行ニ依リ法律ヲ遵守スルノ義務ヲ負フ但シ官民共ニ其執行ヲ受クルモノモ亦多シ此場合ニ於テハ執行ノ命ヲ受クル者ハ官民ニシテ其法律ハ官民共ニ遵守セサルヘカラズ之ヲ要スルニ執行ノ命ハ其法律ヲ遵守スル者ノ受クル所ナリ

憲法第五十五條ニ曰ク凡テ法律勅令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要スト此副署ハ前ニ述ヘタルカ如ク親署ノ後ニ於テスルコトニシテ而シテ法律勅令等ノ原

○行法權 天皇

本ニ於テスルモノナリ公布ノ法律勅令ハ其謄本ニ外ナラズ其副署ハ公布ノ命ヲ奉スルカ爲メニシテ法律ノ制定ニハ關係ナシ又法律勅令ノ執行モ天皇ノ命セラル、所ニシテ大臣ノ副署ノ爲メニ執行ノ力ヲ生スルニアラス又公文式第一條ニ依レハ法律勅令ハ上諭ヲ以テ之ヲ公布ストアレモ憲法實施後ハ上諭ヲ以テ公布セラル、ニハアラサルヘシ何トナレハ憲法第六條ニ公布ヲ命ストアリテ其命ヲ受クル者ハ大臣ニシテ別ニ上諭ヲ以テ公布セラルヘキノ必要ナキノミナラス公文式第一條ハ憲法第六條ニ矛盾スルカ故ニ憲法第七十六條ニ依リ其効力ヲ失フヘキモノナレハナリ

法律公布ノ爲メ國務大臣ノ副署ヲ要スルニ勿論ナレモ所

謂ル國務大臣トハ如何ナル大臣ナルヤ疑義ヲ抱ク者アリ或云ク國務大臣ハ佛國ニ所謂ルみに付とる、と、れた一ニシテ従前ノ翻譯ニモ之ヲ國務大臣トイヒ我總理大臣ニ當ルモノナリ而シテ憲法ハ佛國法律等ニ參酌セラレタルモノナレハ國務大臣ノ名稱モ亦佛國等ニ原因シテ他日總理大臣ヲ改メテ國務大臣ト稱セラルヘク又公文式第三條ニ依ルモ總理大臣即チ國務大臣ノ副署スルヤ明ナリト或云ク然ラス國務大臣ハ諸大臣ノ通稱ニシテ總理大臣チイフニアラス聞ク所ニ依レハ外國人ニ示サレタル英文翻譯ノ憲法ニハ國務大臣ニ複稱ノ語ヲ用ヒラレタリト此譯文ニ依ルモ諸大臣ノ通稱タルヲ知ルヘク又憲法議院法等ニモ諸大臣ノ連署アリ是レ暗ニ憲法第五十五條ニ依ラレタルモ

○行法權 天皇

ノニシテ國務大臣ハ諸大臣ノ通稱タルヲ知ルヘク且ツ憲法第五十五條ニ國務各大臣トアレハ各省大臣タルコト明ナリト此第二説ハ其當ヲ得タルモノナリ然レモ憲法議院法等ヲ引證シタルハ妥當ナラス憲法ハ未タ執行スヘキモノニアラサレハ之ニ依ルヘキノ道理ナシ諸大臣ノ連署ハ憲法ニ關シテハ總テ主任大臣タルヘク且ツ其大典タルノ故ヲ以テ樞密院議長モ亦之ニ連署シタルモノナルヘキノリ之ヲ要スルニ憲法第五十五條ニ依テ國務大臣ハ即テ各省大臣ノ通稱タルコト明了ナリトス

法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經テ成ルモノナレモ勅令ハ天皇ノ行法權内ニ於テ專決シテ發行セラル、モノナリ而シテ其要領ハ憲法第九條ニ在リ其文ニ曰ク天皇ハ法律ヲ執行

スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシム但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得スト故ニ勅令ハ法律ヲ執行スルカ爲メニ發セラル、モノニシテ其勅令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得サルヤ明確ナリ然レモ其公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲メニスルモノニ至テハ其區域尙ホ未タ詳ナラサルニ似タリ何トナレハ天下ノ事皆公安ヲ保持シ民福ヲ増進スル所以ニ在ラサルハナク法律ト雖モ亦其外ニ出テサレハナリ故ニ法律ヲ以テ規定スル所ノ事如何勅令ヲ以テ規定スル所ノ事如何其區域判然セサルモノ、如シ佛國ニテモ法律ハるわトイヒ之ヲ制定スルニハ君主ノ裁可公布ト元老院立法議院等ノ協賛

重要スレハ勅令ハ之ヲでくれトイヒ君主ノ專權ヲ以テ發
 スルモノニシテ其制定ノ方法ハ判然差別アリト雖モ其規
 定スル事件ニ至テハ其差別尙ホ判然セスシテ勅令ニシテ
 法律ニ齊シキモノ實際或ハ之ナキニアラサルヘシ然レモ
 憲法ニ從ヘハ法律ノ規定スヘキモノヲ勅令ニテ規定シタ
 ルモ元老院ニ於テ憲法ニ違反スルモノトシテ其勅令ハ
 之ヲ無効ナラシムルヲ得ルトイヒ尙ホバトビーノ説ニテ
 ハ元老院ニテ默過スルモ裁判所ハ拒ミテ其勅令ヲ適用セ
 サルコトヲ得ルト論セリ公文式第一條ニ依ルニ法律勅令
 ハ之ヲ發布スルモノ之ヲ記草スルモノ皆同一ノ手續ニシテ差
 別ナク從前ハ元老院ノ議ヲ經ルト經サルトヲ以テ區別シ
 今後モ帝國議會ノ議ヲ經ルト經サルトヲ以テ區別スルノ

ミコシテ他ニ其差別ナキニ似タリ然レモ勅令モ閣令モ省
 令府縣令モ皆同一意ノモノニシテ天皇ヨリ出ルモノハ勅
 令内閣ヨリ出ルモノハ閣令諸省ヨリ出テ府縣ヨリ出ルモ
 ノハ省令府縣令タレハ省令府縣令ニシテ法律ノ所定外ニ
 出ルヲ得サレハ勅令閣令モ亦法律ノ所定外ニ出ルヲ得サ
 ルコトヲ推知スヘキナリ之ヲ要スルニ總テ命令ハ行政權
 内ニ在テ發スルモノタレハ法律ヲ行ヒ法律ヲ適用スルカ
 爲メニ發スルモノニシテ法律外ニ於テ別ニ一種ノ命令ア
 ルヘキ理ナカルヘキナリ
 行政權ヲ以テ發スル命令即チ勅令閣令等ハ法律ヲ實際ニ
 適用シ之ヲ執行スルモノニシテ所謂行政規則ト稱スル
 モノナリ例ヘハ立法官ハ裁判官ノ如ク行政官ハ執行官ノ

○行政權 天皇

如シ故ニ法律ハ裁判ニ比スヘク命令ハ執行ノ命令ニ比スヘキナリ裁判外ニ出テ、命令シ又ハ命令ヲ以テ裁判ヲ變更スルヲ得サルナリ佛國ニテモ千八百五十一年十二月以後千八百五十二年四月迄ノ間ハ一時便宜ノ爲メニでくれ、ろわ即チ勅令法トイヒ勅令ヲ以テ法律ト爲スモノアリシト雖モ其他ハ如此キモノアルニアラス我國ニ於テハ維新以後日尙ホ淺ク三權分立ノ如キモ未タ世人ノ之ヲ知ラサルモノアリ故ニ其區域ノ判然セサルカ如キハ當然ノ事ニシテ法律ト勅令トノ混スルモノモ或ハ是レナキニシモ限アラサルヘシ然レモ其原則ニシテ已ニ確立セラル、以上ハ漸チ以テ改メ終ニハ其區別ヲ判然ナラシムルニ至ルヘシ

又法律ト勅令トハ其制裁即チ其罰例ヲ設クルニ付キ殊ニ其區別ヲ明ニセサルヘカラス佛國ニテハ勅令ニ二種アリ純然タル行法權ヲ以テ發スルモノ即チ特ニ法律ノ委任ヲ受ケスシテ皇帝ノ行法權内ニ於テ發スルモノト法律ノ委任ヲ受ケ法律ノ明文ニ基キテ發スルモノト別アリ行法權内ニ於テ發スル勅令ニハ別ニ制裁ヲ設ケテ其違反者ヲ罰スルコトナシ其違反者ハ刑法第四百七十一條第十五ニ依リ尋常ノ違警罪トシテ罰セラル、ノミ法律ノ委任ヲ受ケテ發スル勅令ニハ別ニ一個ノ制裁ヲ設ケテ其違反者ヲ罰スルヲ得然レモ其罰例モ違警罪ノ範圍外ニ出ルヲ得ストセリ我國ニテハ勅令ノ違反者ヲ處スルニ輕罪ノ禁錮罰金ヲ以テスルノ例ハ枚擧ニ暇アラサルノミナラス賭博犯

處分規則(明治十七年一月四日第一號布告)ニハ一年以上十年以下ノ懲罰五十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處スルノ罰例アリ爆發物取締罰則(明治十七年十二月二十七日第三十二號布告)ニハ死刑ニ處スルノ罰例アリ此等ハ今日ヨリ視レハ法律タルニ相違ヲシト雖モ其事ノ性質ヨリ論スレハ行政取締中ノモノニシテ所謂ル安寧秩序ヲ保持スル命令ヲ以テ定メラレテ可ナルモノナリ然レモ若シ其命令ニシテ今後如此キ嚴刑ヲ設クルヲ得ルコト、セハ法律ト勅令トノ差別ハ全ク無効ニ歸スルナルヘシ故ニ余ハ切望ス勅令違反者ヲ罰スルノ程度如何ヲ昭示セラレシコトヲ或曰ク爾後ハ勅令ヲ以テ臣民ヲ罰スルヲ得ス若シ之ヲ罰スレハ憲法ニ違反スルモノナリ憲法第二十三條ニ日本臣民ハ

法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシトアリ故ニ勅令ヲ以テ刑ヲ定メ罪ヲ問フコトヲ得サルヤ明ナリト眞ニ能ク如此クナランニハ單ニ法律ニ示スニ勅令違反ノ罰例ヲ以テセハ茲ニ可ナリ憲法上ヨリ論スレハ此詭實ニ其當ヲ得タルモノナルヘシ如此クナラサレハ憲法第十八條以下ニ臣民ノ權利義務ヲ定メラレタルモ終ニ水泡畫餅ニ屬スヘキナリ

法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ待テ成ルモノナレモ緊急ノ場合ニ於テハ勅令ヲ以テ一時法律ニ代フルコトヲ得憲法第八條ニ曰ク天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス此變則アルハ二個ノ事由ニ基クモ

○行法權 天皇

ノニシテ佛國ノ如キモ亦如此シ第一ハ緊急ニシテ遲緩ス
 レハ公益ニ害アルヲ以テナリバトビーハ其政法畧論ニ緊
 急ノ場合ヲ掲ケテ云ク例ヘハ税關ニ付テスヘハ外國商品
 ノ輸入ヲ禁止シ又ハ輸入税ヲ増額シ又ハ佛國元品ノ輸出
 税ヲ減額シ又佛國產物ノ輸出ヲ許可シ又ハ停止シ若クハ
 一地方ニ於テ商品ノ輸出入ヲ制限スルノ類ノ如シ然レモ
 此變則タル緊急ニ由ルモノナレハ其處置シタル所ニ付テ
 ハ立法議院ノ閉會前若クハ次回ノ會議ニ於テ其承諾ヲ得
 サルヘカラス而シテ其承諾ハ全ク公言スルニ外ナラサレ
 ハ勅令ヲ發シタル當日ニ遡リテ其効力ヲ有スヘシト此說
 ハ直チニ採テ我憲法ノ解ト爲ヌヲ得ヘシ第二ハ第一ニ關
 聯スルモノニシテ閉會タルカ故ニ帝國議會ノ議ヲ經ルノ

暇ナキニ由ルナリ此點モ佛國ニ比スレハ大差アリ佛國ニ
 テハ開會中ト雖モ先ツ勅令ヲ發シテ而シテ後ニ議會ニ付
 ス我國ハ然ラス開會中ニ在テハ必ス先ツ其協賛ヲ經ルコ
 ト、ス共至公至平ナル佛國ノ比ニアラサルナリ
 此勅令ハ素ト一時ノ已ムヲ得サルニ出ルモノナルカ故ニ
 更ニ議會ノ議ニ付スルハ當然ナリ故ニ第八條第二項ニ曰
 ク此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若議
 會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ將來ニ向テ其ノ効力ヲ
 失フコトヲ公布スヘシト議會ノ承諾セサルキハ將來ニ向
 テ其効力ヲ失フト雖モ其否決ハ既往ニ遡テ効力ヲ有スル
 モノニアラストス是レ此明文アル所以ナリ之ニ反シテ議
 會カ承諾シ可決シタルキハ將來ニ向テ法律ノ効力ヲ有ス

ルハ勿論尙ホ既往ニ遡テ其効力ヲ有スヘシ例ヘハ勅令ヲ以テ某ノ商品ノ輸出ヲ禁止シ犯ス者ハ某刑ニ處スルコトトセンニ議會カ之ヲ否決シタルキハ將來ハ其禁止ヲ解クヲ以テ犯則者ノ罰スヘカラサルハ勿論ナレモ否決前ノ犯則者ハ之ヲ罰スヘシ然レモ否決後ニ處分スル者ニ付テハ治罪法第九條犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止トアルニ由リ其公訴消滅スヘシ若シ議會ニテ承諾シ可決シタルキハ其可決前後ニ拘ハラス皆之ヲ罰スヘシ以上ノ場合ニ於テハ或ハ法律ヲ頒布前ニ及ホシ或ハ法律ノ認メサルモノヲ罰スルノ嫌アルヘケレモ決シテ然ルニアラヌ勅令ヲ以テ一時ノ處分ヲ爲スハ憲法ノ許ス所ナリ又可決ノ効力ノ既往ニ及フハ議會ハ勅令ノ當時已ニ黙諾シタル

モノニシテ其可決ハ即チ其當時黙諾シタル所ヲ表明シ公言スルニ外ナラサルモノナレハナリ
 憲法第十條ニ曰ク天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ任免ス但シ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各其ノ條項ニ依ルト是レ亦行政權ニ屬スル事ナリ故ニ立法權司法權ニ關スル官制俸給任免ニハ及ハサルヲ原則トス而シテ此但書ニイフ所ハ立法司法ニ關スルモノニシテ行政ニ屬スルモノハ悉ク天皇ノ專決セラル、所ナリトス立法權即チ帝國議會ノ構成及ヒ議員ノ歳費任免并ニ司法權即チ裁判所ノ官制裁判官ノ俸給任免等ハ皆法律ノ定ムル所ニ依ルモノニシテ行政官ニ於ケルカ如ク天皇ノ專決セラル、所ニ及ラス立法權司法

○行政權 天皇

權ノ特別ナルハ憲法第五十七條以下並ニ議院法諸條章ニ
 徴シテ知ルヘキナリ但シ特ニ其任命ニ限り天皇ノ專決モ
 ラル、所タリ
 天皇ハ陸海軍ヲ統帥シ其編制及ヒ常備兵額ヲ定メ戰ヲ宣
 シ和ヲ講シ及ヒ外國諸般ノ條約ヲ締結ス是レ亦佛國憲法
 ニ定ムル所ニ同シ佛國ニテハ之ヲどるわ、ど、す、うれ、ぬ
 テ即チ君主ノ權トイフ而シテ條約ヲ締結スル權ハ輸出入
 ノ稅額ヲ増減セサル場合ノミナラス尙ホ之ヲ増減スル場
 合ニ於テモ其權ヲ行フヲ得ルモノトシ凡ソ租稅ハ法律
 ヲ以テ定ムトイヘル原則ニ拘ハラサルコト、セリ我國ニ
 於テモ亦如此クナルヘキナリ(憲法第十一條乃至第十三條)
 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス事極メテ切迫ナル場合ニ於テハ司令

官之ヲ宣告ス戒嚴ハ戰時即チ内亂外患ニ際シ兵備ヲ以テ
 全國若クハ一地方ヲ警戒スルノ謂ニシテ其要件及ヒ効力
 ハ法律ノ定ムル所ニ依ル而シテ所謂ハ法律トハ明治十五
 年八月五日第三十六號布告戒嚴令チイフ又同年第三十七
 號布告ニ法律規則中戰時ト稱スルハ外患又ハ内亂アルニ
 際シ布告ヲ以テ定ムル旨ヲ示サレタレモ憲法實施以後ハ
 戰時タルコトヲ布告セラレスト雖モ戒嚴ヲ宣告セラレレ
 ハ則チ戰時タリトスヘキニ似タリ(憲法第十四條)
 戒嚴ハ時機ニ應シ其要スヘキ地境ヲ區畫シテ之ヲ宣告ス
 戒嚴ノ宣告アルキハ臨戰地境內ニ於テハ地方行政事務及
 ヒ司法事務ノ軍事ニ關係アルモノヲ限り其地ノ司令官ノ
 管掌ニ委シ合圍地境內ニ於テハ軍事ニ關係アルト否トチ

○行法權 天皇

分ヲス地方行政事務及ヒ司法事務ハ其地ノ司令官ノ管掌ニ委ス故ニ地方官裁判官檢察官ハ戒嚴ノ場合ニ於テハ司令官ニ就テ其指揮ヲ請ハサルヘカラス又合圍地境内ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ヒ左ニ開列スル犯罪ニ係ルモノハ總テ軍衙ニ於テ裁判ス刑法第二編第一章皇室ニ對スル罪第二章國事ニ關スル罪第三章靜謐ヲ害スル罪第四章信用ヲ害スル罪第九章官吏瀆職ノ罪第三編第一章第一節謀殺故殺ノ罪第二節毆打創傷ノ罪第六節撞人ヲ逮捕監禁スル罪第七節脅迫ノ罪第二章第二節強盜ノ罪第七節放火失火ノ罪第八節決水ノ罪第九節船舶ヲ覆没スル罪第十節家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

天皇ハ爵位勳章及ヒ其他ノ榮典ヲ授與ス故ニ公侯伯子男

五等ノ爵正從一位ヨリ八位ニ至ル位記勳章年金賞狀等總テ榮典ヲ與フルハ天皇ノ權内ニ在リ(憲法第十五條)

天皇ハ大赦特赦減刑及ヒ復權ヲ命ス(憲法第十六條)刑法第六十四條ニ曰ク大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得ト此大赦ハ佛語ニ所謂ルあむにすちニシテあむにすちハ犯罪ヲ忘却スルノ謂ナリ故ニ刑法用フル所ノ大赦ハ古來東洋ニ行ハレシ大赦ト異ナリ古來東洋ニ行ハレシ大赦ハ犯罪ヲ忘却スルノ趣旨ニ出テスシテ國君ノ登極昇遐其他冠婚改元日食地震火災等吉凶ノ事アルニ當テ與ヘタルモノナリ故ニ支那ニ於テモ我國ニ於テモ赦典ノ弊ヲ論シ赦典ヲ以テ偏枯ノ物ナリトセリ余ハ刑法述義ニ於テ今日ノ大赦ハ昔日ノ大赦ニアラス偏枯ノ物ニアラスシテ公

○行法權 天皇

平ノ物タルヲ論セリ然レモ大赦ヲ與フルノ趣旨ニ至テハ或ハあむに守ちト小差ナキニアラスシテ即チ彼此相混淆セシモノニ似タリ其一半ハあむに守ちト如ク犯罪ヲ忘却シテ之ヲ罰スルノ必要ナキニ出テ其一半ハ惠澤ヲ施スノ趣旨ニ出ルモノ、如シ明治二十二年二月十二日勅令第十二號大赦ノ令ハ刑法頒布後初テ發セラレシモノニシテ其上諭ニ曰ク朕憲法ヲ發布スルニ當リ此盛典ヲ表シ惠澤ヲ施サソカ爲ニ特ニ命シテ左ノ條項ニ依リ大赦ヲ行ハシムト故ニ其惠澤ノ爲メナルコト知ルヘシ然レモ所謂左ノ條項ナルモノヲ觀レハ皆國事ニ關係セサルハナシ其國事ニ關係スル所アルヲ以テ憲法ヲ發布セラル、ノ今日ニ在テハ之ヲ罰スルノ必要ヲ見ス即チ其犯罪タルヲ忘却スル

ノ趣旨アルヲ推知スヘキナリ尙ホ他日ノ參考タルヘキヲ以テ勅令第十二號ノ全文ヲ此ニ掲載スヘシ

第一條 本令發布以前ニ於テ左ノ罪ヲ犯シタル者ハ之ヲ赦免ス

- 一 刑法第一百七條第一百九條ノ罪
- 二 刑法第二百一一條第二百三條第二百二十五條第二百二十六條第二百二十七條ノ罪
- 三 刑法第二百二十九條第三百十條第三百十一條第三百三十二條第三百三十三條第三百三十四條ノ罪
- 四 刑法第三百三十六條第三百三十七條第三百三十八條ノ罪
- 五 刑法第四百一十一條ノ罪
- 六 陸軍刑法第五十條第五十三條第五十四條第五十五

○行法權 天皇

條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條ノ罪

七 陸軍刑法第六十六條第六十七條ノ罪

八 陸軍刑法第六十九條第七十條第七十一條ノ罪

九 陸軍刑法第九十三條第九十四條ノ罪

十 陸軍刑法第九十九條第一百條ノ罪

十一 海軍刑法第五十六條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條ノ罪

十二 海軍刑法第八十六條第八十七條ノ罪

十三 海軍刑法第一百條第一百一條ノ罪

十四 海軍刑法第一百十條第一百十一條ノ罪

十五 海軍刑法第二百二十六條ノ罪

十六 保安條例ノ罪

十七 集會條例ノ罪

十八 治安ヲ妨害スルノ目的ヲ以テ爆發物取締罰則ヲ犯ス罪

十九 新聞紙條例第二十一條第二十二條ニ違ヒ第三十條第三十一條ニ該ル罪及ヒ第三十二條ヲ犯ス罪

但第三十條ニ該ル者ノ内風俗ヲ壞亂スルカ爲メ發賣頒布ヲ禁ゼラレタル新聞紙ヲ發賣頒布シタル者ハ赦免セズ

○行法權 天皇

政治ニ關スル意思ヲ以テ同條例第一條第三條ニ
違ヒ第二十七條ニ該ル罪及ヒ第十六條第十七條
第十八條ニ違ヒ第二十九條ニ該ル罪

二十

出版條例第十六條第十七條第十八條ニ違ヒ第二
十七條ニ該ル罪及ヒ第二十四條ヲ犯ス罪但第二
十七條ニ該ル者ノ内風俗ヲ壞亂スル爲メ發賣頒
布ヲ禁セラレタル文書圖畫ヲ發賣頒布シタル者
ハ赦免セス

政治ニ關スル意思ヲ以テ同條例第三條ニ違ヒ第
二十一條ニ該ル罪第六條第七條ニ違ヒ第二十二
條第二十三條ニ該ル罪及ヒ第十五條第十九條第
二十條ニ違ヒ第二十七條ニ該ル罪

第二條 舊法ニ依リ處斷セラレタル罪ト雖ヒ其性質前條
ニ記載シタル罪ト同一ナル者ハ之ヲ赦免ス

第三條 數罪俱發例ニ依リ處斷セラレタル者最重ノ罪赦
免ヲ得タル場合ト雖ヒ他ノ罪ニ其効ヲ及ホサス

第四條 赦免ヲ得ルト雖ヒ既ニ徵收シタル罰金科料及ヒ
沒收シタル物件ハ還付セス

第五條 陸軍大臣海軍大臣司法大臣ハ本令ノ施行ニ關シ
必要ノ指揮ヲ爲ス可シ

大赦ハ其事ニ就テ與フルモノナレハ未發既發ヲ論セス又
其人ノ甲乙ヲ問ハス一體ニ赦免スルモノナリ勅令第十二
號ニ本令發布以前ニ於テ左ノ罪ヲ犯シタル者ハ之ヲ赦免
ストアルノミナラス治罪法第九條ニ於テ大赦ヲ以テ公訴

○行法權 天皇

消滅ノ一原由ト爲シタリ又人ニ由テ與フルモノニアラサ
 ルカ故ニ該勅令第三條ニ於テ一罪赦免ヲ得ルト雖モ他罪
 ニ其効力ヲ及ボサ、ルコトヲ示シタリ又大赦ニ由リ免罪
 ナ得タル者ハ附加刑ハ總テ消滅ス且ツ再犯ノ數ニ加フル
 コトナシ(刑法第六十四條第九十七條)然レモ既ニ徵收シタ
 ル罰金科料及ヒ沒收シタル物件ハ還付セス此等ハ已ニ政
 府ノ財産中ニ入りタルモノニシテ或ハ所謂ル囊中ニ入テ
 混シ或ハ他ニ轉讓シテ人ノ既得ノモノタレハナリ勅令第
 四條ハ即チ此意ヲ示シタルモノナリ假令モ今後特ニ明示
 スルコトナキモ其如此クナルヘキハ論ヲ俟タス
 特赦ハ恩惠ノ趣旨ニ出テ其事ニ就テ與フルモノニアラス
 故ニ同一事ニ付テ共犯人中ノ一人ハ特赦ヲ得ルモ他ノ共

犯人ハ之ヲ得サルコトアリ又特赦ハ裁判確定ノ後ニ於テ
 與フルモノナレハ公訴消滅ノ原由ト爲ルコトナシ又特赦
 ハ刑ヲ免スルニ過キスシテ罪跡ヲ消滅スルニアラサレハ
 再犯ノ數ニ算入セラル、ノミナラス復權ノ如キハ特ニ赦
 狀中明示スルニアラサレハ之ヲ得ルヲ得ス其規則ハ刑法
 第六十四條治罪法第四百七十七條以下ニ在リテ勅裁ヲ以
 テ與フルモノタルコトハ治罪法ニ明示スル所ナリ
 減刑ハ特赦ノ一種ニシテ佛語ニ之ヲこんみ^たたしよん^トイ
 ヒ嚴刑ヲ寬刑ニ換フルノ謂ニシテ刑法草案ニ特典トアル
 モノ是レナリ特赦ハ佛語ニ之ヲぐら^すトイヒ恩惠ノ謂ニ
 シテ刑法草案ニ常赦トアルモノ是レナリ思フニ今刑法ニ
 特赦トアルハ即チ是レ常赦特典ヲ合稱シタルモノナルヘ

シ然レハ特赦中自ラ二種アリテ一ハ刑ヲ全免シ一ハ刑ヲ減輕スルモノナリ憲法第十六條ニ所謂ル減輕ハ此第二種ノ刑ヲ減輕スルモノナイフナルヘシ而シテ減輕ニハ或ハ主刑ヲ減輕スルモノアリ或ハ單ニ附加刑ノミヲ減免スル等ノモノアリテ減輕ノ程度如何ハ其場合ニ由ルモノニシテ法律上一定ノ規則ナシ

復權ハ刑法第六十三條以下治罪法第四百七十條以下ニ依テ與フルモノニシテ是レ亦一種ノ赦典ニ外ナラス故ニ勅裁ヲ以テ之ヲ與フ其勅裁ヲ以テ與フルモノタルコトモ亦刑法治罪法ニ明示スル所ナリ

第二款 國務大臣及ヒ樞密顧問

國務大臣ハ前ニ論ヒシカ如ク各省大臣ノ通稱タルコトハ

憲法第五十五條ニ國務各大臣トアルニ依テ明了ナリ國務大臣即チ各省大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任ス而シテ其責任ハ天皇ニ對シテ負フモノニシテ帝國議會等ニ對シテ負フモノニハアテサルナリ尙明治十八年十二月二十三日ノ詔勅ニ參照シテ其意ヲ會得スヘシ此詔勅ハ後ニ之ヲ掲ク佛國ニテモ古昔ハ國會ニ對シテ責任ヲ負ヒタルカ故ニ國會多數ノ意見ニ反スルキハ其職ヲ辭セサルヲ得サリシト雖モ帝國ノ時ニ於テハ皇帝ニ對シテ責任ヲ負フノミナレハ皇帝ノ意思ニ反セサレハ其職ヲ辭スルニ及ハス千八百五十一年佛國憲法第十三條ニ曰ク大臣ハ國君ニノミ附屬スル者ニシテ政府ノ所爲ニ關スル諸件ニ付キ各自其責任スヘク相連帶シテ責ニ任スルコトナシ且ツ其犯罪ハ元

○行法權

國務大臣及樞密顧問

老院ヨリスルニアラサレハ之ヲ訴フルコトヲ得スト故ヨ
 只皇帝ニ對シテ責任ヲ負フニ過キサレノミナラス連帶シ
 テ各大臣カ責ニ任スルコトモ是レナシ古昔ハ連帶シテ責
 ニ任シタリトイフ又元老院ハ昔日ノ如ク大臣ニ對スル裁
 判權ヲ有セサルヲ以テ帝國ノ時ニハ元老院ノ求刑モ皇帝
 ノ所爲ニ由リ結局無効ニ屬スルニ至ルヘシトイヘリ何ト
 ナレハ大臣ノ犯罪ハ高等法院ノ管轄スル所ニシテ而シテ
 高等法院ハ勅令ヲ以テ開設スルモノナレハ又勅令ヲ以テ
 之ヲ開設セサルヲ得ヘシ故ニ勅令ヲ以テ開設セサルキハ
 大臣ノ罪ヲ問フニ由ナキナリ
 我國ニ於テモ各大臣ハ天皇ニ對シテ責任ヲ負フノミナル
 ヘシ又連帶シテ各大臣カ責ニ任スルコト決シテ是レナカ

ルヘシ連帶ハ法律ノ明文ニ由テ生スルモノナリ何トナレ
 ハ私事ニ付テハ勿論公事ニ係ルキト雖モ道理上他人ノ責
 任ハ自己ニ於テ負擔スヘキニアラサレハナリ且ツ明治十
 九年二月十九日勅令第二號各省官制第二條ニ各省大臣ハ
 其主任ノ事務及今後法律勅令ニ依リ主任ニ屬スル事務ニ
 付其責ニ任スヘシトアリ是ニ由テ之ヲ視レハ法律上各大
 臣ノ連帶セサルコト知ルヘキナリ又各大臣ノ犯罪ハ其重
 罪ニ係ルキハ治罪法第八十三條ニ依リ高等法院ニ於テ管
 轄スト雖モ其輕罪違警罪ニ係ルキハ輕罪裁判所違警罪裁
 判所ニ於テ管轄シ常人ノ犯罪ト異ナルコトナシ又高等法
 院ハ司法大臣ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ開クト雖モ明治十
 六年十二月二十八日第四十九號布告ニ依リ高等法院ヲ開

○行法權

國務大臣及樞密顧問

カサルキハ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得故ニ必シ
モ高等法院ノ管轄タルニアラス又治罪法第八十三條ニハ
勅任官ノ犯シタル重罪トアルヲ以テ大臣ノ犯シタル重罪
ニ限ラス總テ勅任官ノ重罪ハ皆高等法院ノ管轄スル所ヲ
リ
國務大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任スルカ故ニ法律勅令其
他國務ニ關スル詔勅ニ副署ス前ニモ論セシカ如ク従前ハ
明治十九年勅令第一號公文式第三條勅令第二號各省官制
第四條ニ依リ法律勅令ニハ總理大臣ト主務省大臣ト連署
セシト雖モ憲法ニハ總理大臣ノコト見エサレハ主務省大
臣一名副署シテ總理大臣ノ副署ヲ要セサルカ如シ然レモ
總理大臣ハ従前ノ如ク之ヲ置カルヘク故ニ又總理大臣ハ

必ス主務省大臣ト共ニ副署シ而シテ其連署シタル總理大
臣ト主務省大臣トハ相連帶シテ其責ニ任セサルヘカラサ
ルモノ、如シ然レモ總理大臣ニハ一定ノ職制ナク又内閣
ニモ一定ノ官制ナケレハ未ダ之ヲ詳ニスルヲ得ス但内閣
ノ樞要ナルハ論ヲ俟タサル所ナレハ此ニ其梗概ヲ述ヘン
而シテ明治十八年十二月太政大臣ノ奏議並ニ同月二十三
日ノ詔勅ハ沿革ヲ知り又内閣ヲ置カレタル趣旨ヲ見ルヘ
キモノナレハ先ツ茲ニ之ヲ掲クヘシ
奏議ニ曰ク臣躬台鼎ノ重キヲ荷ヒ日夕憂懼以テ報効ヲ圖
ル嚮キニ親シク陛下内閣ヲ改制スルノ旨ヲ承ク幸ニ微衷
ヲ披キテ以テ聖德ヲ仰クノ機ヲ得タリ竊ニ思フ今日ノ事
前途猶遠シ立憲ノ基ヲ建テ以テ中興ノ業ヲ終ヘントセハ

○行法權

國務大臣及樞密顧問

區々前轍ニ因習スルノ能ク成スヘキ所ニ非サルナリ維新ノ初陛下幼冲臣寵撰ヲ叨リニシ大政ヲ董督ス實ニ止ムコトヲ得サルニ出ツ蓋大寶ノ令唐ノ尙書省ニ倣ヒ大政官ヲ以テ八省ヲ統ヘ八省ハ左右辨ニ分属シ官符ヲ得テ施行ス明治二年職員令ヲ定メ六省ヲ置クニ當テ仍大寶ノ制ニ依リ大政官ヲ以テ諸省ノ冠首トシ諸省ヲ以テ隸屬ノ分官トス此レヨリノ後諸省ハ專ラ指令ヲ大政官ニ仰キ大政官ハ批テ下シテ施行セシメ凡ソ文書ノ上奏スル者ハ皆大政官ニ經由シ往復ノ間省ノ寮ニ於ケルニ均シ此レ蓋一時ノ權宜ニシテ獨親政統一ノ體ヲ得サルノミナラス亦各省長官ノ責任ヲ輕クシ徒ニ曠滯ノ弊ヲ爲ス者ナリ方ニ今陛下聖德日ニ躋リ大政ヲ綜攬シ事ヲ内閣ニ視諸宰臣ヲ引見シ文

武ノ務親シク奏議ヲ聽キ玉フ而シテ中外ノ事盤錯多端官制宜シク更張スヘク財政宜シク節度ニ就カシムヘク要務ノ經畫措施スヘキ者一ニシテ足ラス此レ宜シク時宜ヲ斟酌シ古今ヲ變通シ太政官諸省ニ冠首タルノ制ヲ改メ併セテ太政官諸職ヲ廢シ内閣ヲ以テ宰臣會議御前ニ事ヲ奏スルノ所トシ萬機ノ政專ラ簡捷敏活ヲ主トシ諸宰臣入テハ大政ニ參シ出テハ各部ノ職ニ就キ均シク陛下ノ手足耳目タリ而シテ其中一人ヲ撰ヒ專ラ中外ノ職務ニ當リ旨ヲ承ケテ宣奉シ以テ全局ノ平衡ヲ保持シ以テ各部ノ統一ヲ得セシムヘシ此レ乃祖宗簡實ノ政親裁ノ體制ニシテ立憲ノ義亦是ニ外ナラス此ノ如クニシテ綱紀振張シ各部宰臣均シク其責ニ任シ用テ節シ實ヲ務メ以テ立國ノ目的ヲ達ス

○行法權

國務大臣及樞密顧問

ルコトヲ得ハ天下ト之ヲ公ニスヘク宇内各邦ト之ヲ競フ
 ヘク陛下中興ノ大業始メテ成緒ヲ終ヘ徵臣犬馬ノ勞亦與
 カリテ餘榮アラン若シ其人ニ至テハ必陛下ノ聖鑑ニ由リ
 大局ニ明達シ時務ニ精練ナル者ヲ得テ以テ之ニ任スヘシ
 而シテ中外多端ノ機務ニ當ルカ如キハ實ニ臣カ堪フル所
 ニ非サルナリ伏テ願クハ陛下臣カ誠ヲ察シ今ノ時ニ及テ
 内閣ノ組織ヲ改メ併セテ臣カ職ヲ解キ臣ヲシテ獎勵贊襄
 ノ徵忠ニ負カサラシメハ獨臣カ幸ノミニ非サルナリ言非
 常ナルカ如クニシテ實ニ時宜ノ已ムコトヲ得サルニ出ツ
 惟々陛下之ヲ斷シ玉ヘ謹奏

此奏議ニ依レハ太政官ハ唐ノ尙書省ニ倣フテ設ケタルモ
 ノニシテ明治二年職員令ヲ定メ六省ヲ置クニ當テモ仍ホ
 大寶ノ制ニ依リ太政官ヲ以テ六省ノ冠首トシ六省ヲ以テ
 隸屬ノ分官ト爲シタルヤ知ルヘキナリ

又明治十八年十二月二十三日ノ詔勅ニ曰ク朕惟フニ經國
 ノ要ハ官其制ヲ定メテ機關各其所ヲ得ルニ在リ内閣ハ萬
 機親裁專ラ統一簡捷ヲ要スヘシ今其組織ヲ改メ諸大臣ヲ
 シテ各其重責ニ當ラシメ統フルニ内閣總理大臣ヲ以テシ
 以テ從前各省太政官ニ隸屬シ上中下行經由繁複ナルノ弊
 ヲ免レシム乃各部ニ至テハ官守ヲ明カニシ以テ濫弊ヲ除
 キ選敍ヲ精クシ以テ才能ヲ待テ繁文ヲ省キ以テ淹滯ヲ通
 シ冗費ヲ節シ以テ急要ヲ擧ケ規律ヲ嚴ニシ以テ官紀ヲ肅
 ニシ除クニ以テ施政ノ整理ヲ圖ラントス是レ朕カ諸大臣
 ニ望ム所ナリ中興ノ政一タヒハ進ミ一タヒハ退クヘカラ

○行法權

國務大臣及樞密顧問

大華ヲ去リ實ヲ務メ綱舉リ目張リ永遠繼クヘカラシム諸
 臣其レ各朕カ意ヲ體シテ奉行スル所アレト奏議ト詔勅ト
 ニ依レハ内閣ハ太政官ノ一變シタルモノニシテ内閣總理
 大臣ハ太政大臣ニ當ルモノナリ而シテ内閣ハ天皇ノ大政
 ナ親裁セラル、所ニシテ國務各大臣カ天皇ヲ轉弼シ國務
 ナ整理スル所ナリ内閣ハ内閣總理大臣及外務内務大藏陸
 軍海軍司法文部農商務遞信ノ諸大臣即チ國務大臣ヲ以テ
 之ヲ組織ス明治維新後ハ太政大臣左右大臣參議各省卿ヲ
 置キ大政ヲ行ハレタレモ明治十八年十二月二十二日ニ至
 テ之ヲ廢止シ之ニ換フルニ内閣總理大臣以下ノ諸大臣ヲ
 以テモリ而シテ如此ク改革セラレタルモ其改革ハ布告ヲ
 以テ天下ニ公示セラレタルニアラス明治十八年十二月二

十二日太政官第六十九號達ヲ以テ官省院廳府縣ニ達セラ
 レタルノミナルモ當時ノ達ハ即チ勅令ノ効アルモノニシ
 テ而シテ其事タル天皇ヲ輔弼シテ大政ヲ翼賛スルニ過キ
 サルヲ以テナルヘシ故ニ憲法ニ其明文ナシト雖モ依然内
 閣ヲ置キ總理大臣ヲシテ政務ヲ總理セシメラルヘキナリ
 故ニ又總理大臣ハ即チ國務大臣ノ總理タルニ過キサルヘ
 キナリ

國務大臣及ヒ政府委員ハ何時タリトモ貴族院衆議院又ハ
 其委員會ニ出席シ及ヒ發言スルヲ得(憲法第五十四條議
 院法第四十三條第五十七條)然レモ之レガ爲メニ議員ノ演
 說ヲ中止セシムルヲ得ス(議院法第四十二條)又其發言ハ
 表決ノ數ニ入ラス(議院法第四十五條)又國務大臣ハ其職權

○行法權

國務大臣及樞密顧問

上ヨリ樞密院ニ於テ顧問官タルノ地位ヲ有シ議席ニ列シ
 表決ノ權ヲ有ス又國務大臣ハ委員ヲ差シテ會議ニ出席シ
 演述及ヒ說明ヲ爲サシムルヲ得但シ表決ノ數ニ加ハラス
 國務大臣ハ其主任ノ事務ニ付法律勅令ノ制定廢止及ヒ改
 正ヲ要スルコトアルキハ案ヲ具ヘ閣議ニ提出スルコトヲ
 得又其主任ノ事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法
 律勅令ノ範圍内ニ於テ法律勅令ヲ施行シ又ハ安寧秩序ヲ
 保持スル爲メニ閣令又ハ省令ヲ發スルコトヲ得而シテ閣
 令ハ内閣總理大臣ノ發スル所ニシテ省令ハ各省主務大臣
 ノ發スル所ナリ其省令ニハ罰金二十五圓以下又ハ禁錮二
 十五日以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得以上ノ閣令省令ハ即
 チ所謂ル行政規則ナルモノナリ(公文式第四條第五條各省

官制第五條第六條第七條

又各省大臣ハ行政ノ長官タルヲ以テ其主任ノ事務ニ付警
 視總監北海道長官府知事縣令ヲ監督シ若シ警視總監北海
 道長官府知事縣令ノ處分又ハ指令ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害
 シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルキハ其處分指令ヲ停
 止シ又ハ取消スコトヲ得又所部ノ官吏ヲ總督シ奏任官以
 上ノ進退ハ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任以下ハ之
 チ專行ス又俸給豫算額内ニ於テ其省限リ定員ヲ設ケ判任
 官ヲ任用スルコトヲ得又法律勅令ノ定ムル所ニ從ヒ部下
 ノ官吏ヲ懲戒ス(各省官制第十一條第十二條第十六條第二
 十四條)

樞密院ハ明治二十一年四月二十八日勅令第二十二號ヲ以

○行法權 國務大臣及樞密顧問

テ設ケラレタルモノニシテ其上諭ニ曰ク朕元勳及練達ノ人ヲ撰ミ國務ヲ諮詢シ其啓沃ノ力ニ倚ルノ必要ヲ察シ樞密院ヲ設ケ朕カ至高顧問ノ府トナサントス云々故ニ其人ハ元勳若クハ練達ノ人ニシテ重要ノ國務ヲ諮詢セラル、カ爲メニ撰任セラル、者ナリ而シテ年齢四十歳ニ達シタル者ニアラサレハ樞密顧問官タルヲ得ス(憲法第五十六條 樞密院官制第一條第四條)

樞密院ハ第一議長一人第二副議長一人第三顧問官十二人以上第四書記官長一人及書記官數人ヲ以テ組織ス議長副議長顧問官ハ親任ニシテ書記官長ハ勅任書記官ハ委任タリ(樞密院官制第二條第三條)

樞密院ハ左ノ事項ニ付會議ヲ開キ意見ヲ上奏シ勅裁ヲ請

フヘシ

- 一 憲法及ヒ憲法ニ附属スル法律ノ解釋ニ關シ及ヒ豫算其他會計上ノ疑義ニ關スル爭議
- 二 憲法ノ改正又ハ憲法ニ附属スル法律ノ改正ニ關スル草案
- 三 重要ナル勅令
- 四 新法ノ草案又ハ現行法律ノ廢止改正ニ關スル草案列
- 五 國交渉ノ條約及ヒ行政組織ノ計畫
- 五 前諸項ニ掲クルモノ、外行政又ハ會計上重要ノ事項

- ニ付特ニ勅命ヲ以テ諮詢セラレタルキ又ハ法律命令
- ニ依テ特ニ樞密院ノ諮詢ヲ經ルヲ要スルキ

右第三項重要ナル勅令ニハ樞密院ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記

○行法權 國務大臣及樞密顧問

職大然レト素ト行政立法ニ關スル天皇ノ顧問ニ外ナラハ
 ルヲ以テ施政ニ干與スルコトヲ得ス故ニ又帝國議會若ク
 ハ其一院又ハ官署又ハ臣民ヨリ請願上書其他通信ヲ受領
 スルコトヲ得ス又內閣及ヒ各省大臣トノミ公務上ノ交渉
 ナ有シ其他ノ官署帝國議會又ハ臣民トノ間ニ文書ヲ往復
 シ又ハ其他ノ交渉ヲ有スルコトヲ得ストス(樞密院官制第
 六條乃至第八條樞密院事務規程第二條第三條)

第六章 司法權

司法權モ亦統治權中ノ一ニシテ天皇ノ總攬セララル、所ナ
 リト雖モ之ヲ行フモノハ裁判所ナリ故ニ憲法第五十七條
 ニ曰ク司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行
 フト置テ王朝ノ盛時ニ於テハ裁判ハ天皇ノ親ラセラレシ

所ニシテ天皇ハ昧爽朝堂ニ出御アリ大臣以下左右ニ侍
 坐シ高案ヲ階下ニ設ケ箱ヲ置キ人民ハ其箱中ニ詞狀ヲ投
 マテ退ク左右大少辨少納言大史外記次ヲ逐フテ其詞狀ヲ
 御前ニ於テ展讀シ奏陳商議シテ天皇之ヲ判決セララル、ナ
 例トセリ然ルニ弘仁中ヨリ天王朝堂ニ出御セラレス空ク
 御座ヲ設ケ藏人ヲシテ其傍ニ坐シテ傳宣セシムルコトニ
 至リシトイフ故ニ司法權ハ昔日ハ天皇ノ躬ラ行ハセラレ
 タルモノニシテ其後有司ノ之ヲ行フニ及ヒテモ其有司ハ
 即チ天皇ニ代ハリテ之ヲ行フ者タルハ論ヲ待タサル所ナ
 リ今憲法ニ於テ天皇ノ名ニ於テ裁判所之ヲ行フコトヲ示
 サレタルハ是レ即チ王朝盛時ノ古制ニ基キタルモノトイ
 フテ可ナリ而シテ所謂ル裁判所ハ民事刑事ノ裁判所ニシ

○司法權

治安裁判所始審裁判所違警罪裁判所輕罪裁判所重罪裁判所高等法院及ヒ控訴院大審院ヲイフ而シテ控訴院大審院ハ民事刑事ヲ兼ネタル上訴裁判所ナリ往昔ハ行政官ニシテ裁判官ヲ兼ネ行政權ト司法權トヲ混シテ一所ニ之ヲ掌握セリ或ハ別ニ之ヲ分掌スルコトアリシモ司法權ノ獨立ノ如キハ曾テ見サル所ナリ或ハ彈正臺ヲ置キ或ハ監察ヲ設クル等ノコトアリテ官吏ノ非違ヲ檢彈セシト雖モ要スルニ行政官ノ專横ナル處置ハ免ル、能ハサリシナリ徳川氏ノ時ニ在テハ奉行所評定所ナルモノハ實ニ民刑ノ裁判所タリシモ又行政ノ事務ヲ兼ネタリ維新ノ後ニ至テモ亦然リ當時所謂ル判事ナルモノハ今日ヨリ之ヲ觀レハ裁判官ノ名稱ノ如クナルモ決シテ然ルニアラス今日ノ府縣

知事ニ相當スル行政官ナリ而シテ判事ハ即チ司法行政ノ二權ヲ兼有セリ憲法ニ於テハ明ニ司法權ト行政權トヲ分離シ且ツ司法權ノ獨立ヲ認メラレタルモ其分離シ獨立スルニ至リタル因由ハ實ニ明治ノ初年ニ在リ即チ明治四年十二月二十六日ノ布告ハ是レ其因由ナリ此布告ハ司法省中ニ東京裁判所ナルモノヲ置キ東京府下ニ係ル聽訟斷獄ノ事務ヲ取扱ハシメタルモノニシテ爾後漸次ニ大阪府裁判所長崎縣裁判所等ヲ置キ之ヲ府縣裁判所ト稱シタリ其後明治八年九月八日司法省達ヲ以テ東京裁判所ニ支廳ヲ置キ勸解夫爲サシメタリ是レ實ニ今日ノ勸解裁判所即チ治安裁判所ノ嚆矢ナリ明治九年九月第十號布告ヲ以テ府縣裁判所ヲ廢シテ地方裁判所ヲ置キ同年同月司法省

○司法權

第六十六號達ヲ以テ地方裁判所ノ下ニ支廳及ヒ區裁判所ヲ置キ而シテ支廳ハ今日モ亦現存シ區裁判所ノ名稱ハ治罪法實施ニ及テ廢セラレタリ

違警罪裁判所輕罪裁判所重罪裁判所高等法院ハ明治十三年七月十七日第三十七號布告ノ治罪法ニ於テ初テ設置セラレタルモノニシテ治罪法ハ明治十四年七月八日第三十六號布告ヲ以テ明治十五年一月一日ヨリ施行セラレタリ

明治八年五月第九十五號布告ヲ以テ初テ上等裁判所ヲ東京大阪福島長崎ニ置キ爾來漸次増加シテ其總數七個所ニ至レリ今ノ控訴院ハ即チ此上等裁判所ナリ上等裁判所ハ明治十四年第五十三號布告ヲ以テ之ヲ控訴裁判所ト改稱シ且ツ此布告ヲ以テ控訴裁判所始審裁判所治安裁判所ヲ

置キタルニ由リ上等裁判所地方裁判所及ヒ區裁判所ノ名稱ハ消滅シタリ其始審裁判所治安裁判所ノ名稱ハ今日ニ至テ尙ホ依然繼續スル所ナレト獨控訴裁判所ハ明治十九年五月四日勅令第四十號ヲ以テ之ヲ控訴院ト改稱セラレタリ

大審院ハ明治八年四月第五十九號布告ヲ以テ初テ設ケラレタルモノニシテ爾後其内部ニハ多少ノ變更アリシト雖ト其大體ニ於テハ更ニ變更セシ所ナシ

明治八年五月二十四日第九十一號布告ヲ以テ初テ大審院諸裁判所職制章程ヲ定メ明治十年二月十九日第十九號布告ヲ以テ之ヲ改正シ此改正ノ職制ニハ大審院ハ長一人並ニ判事屬アリテ其人員ヲ定メス上等裁判所ニモ所長一人

○司法權

並ニ判事判事補属アリテ其人員ヲ定メス地方裁判所ニモ
 所長一人判事補属アリテ其人員ヲ定ムルコトナシ且ツ大
 審院以下皆裁判ハ一人ノ裁判官之ヲ爲シ其章程ノ如キモ
 粗ニシテ今日ヨリ之ヲ觀レハ極メテ不完全ニシテ且ツ聞
 ヲ所ニ依レハ下調ヲ爲シ裁判言渡案ヲ作ルカ如キモ判事
 補若クハ属官ノ爲ス所ニシテ判事ナル者ハ殆ト有名無實
 僅ニ裁判言渡ヲ爲スニ過キサリントイヘリ明治十九年五
 月四日勅令第四十號ヲ以テ裁判所官制ヲ公布セラル此官
 制ハ現行スル所ナリ而シテ治安裁判所始審裁判所ノ審理
 判決ハ裁判一人ニテ之ヲ行ヒ控訴院ノ審理判決ハ主任局
 長ヲ合セテ裁判官三人大審院ノ審理判決ハ主任局長ヲ合
 セテ五人合議列席シテ之ヲ行ヒ重罪裁判所高等法院ノ職
 員ハ治罪法ノ定ムル所ニ依ルコト、セラレタリ其治罪法
 ノ定ムル所ハ法律ノ定ムル所ナレトモ其他ハ勅令ノ定ムル
 所ナリ爾後ハ總テ裁判所ノ構成ニ係ルモノハ法律ノ定ム
 ル所ニ依ラサルヘカラス此法律ノ定ムル所ニ依リタル裁
 判所ハ即チ憲法第二十四條ニ所謂ル法律ニ定メタル裁判
 官ニシテ日本臣民カ裁判ヲ受クル所以ノモノナリ
 憲法第五十七條ハ世間ニ所謂ル司法ノ獨立ヲ認メタルニ
 外ナラサルモノナリ故ニ裁判所ニ於テ法律ニ背クコトア
 リト雖モ其處置ハ必シモ憲法ニ違反シタルモノニアラス
 若シ憲法ニ違反シタルモノナルニ於テハ其裁判所ハ裁判
 所ニアラス其裁判モ裁判トスルニ足ラス其裁判ハ憲法上
 成立セサルモノニシテ徒ニ執行スヘカラサルノミナラス

○司法權

如何ナル効力ヲモ有セサルナリ然レモ其基礎ニ於テ法律ニ從フ以上ハ裁判所ハ即チ裁判所ニシテ其裁判モ亦是レ裁判ナレハ上訴シテ取消スニアラサレハ之ニ從順セサルヘカラス只法律ニ依テ之ヲ行ハス法律ノ定ムル所ニ違フトイフノ一事ヲ以テ憲法ニ違反シタルモノトハイフヘカラス

已ニ司法權ハ獨立シテ行政官ノ檢束ヲ受クルコトナシ且ツ天皇ノ名ニ於テ之ヲ行フカ故ニ從前ハ行政裁判ニ屬スルモノハ裁判言渡案ヲ作り司法省ノ旨ヲ承ケ太政官又ハ内閣ノ裁令ヲ經テ宣告シタリシト雖モ憲法實施後ハ如此キコトナルヘシ(明治七年司法省第二十四號達明治十五年司法省丁第十五號達)何トナレハ天皇ノ名ニ於テ之ヲ行フ

ニ及ヒテハ内閣司法省等ノ指令ヲ受クヘカラサレハナリ若シ指令ヲ受クルニ至ラハ君權ヲ侵スコト是レヨリ甚シギハナカルヘシ是レ實ニ彼此矛盾シテ併行スヘカラサルモノナリ况ンヤ行政裁判トイフト雖モ單ニ官署ニ對スルノミニシテ必シモ眞ニ所謂ル行政裁判ナルモノニアラサルニ於テナヤ

裁判所ハ獨立シテ司法權ヲ行フカ故ニ其人ノ任免ハ最正確ニセサルヘカラス然ラサレハ其名ハ獨立スト雖モ其實ハ獨立スル能ハサルナリ爾後ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ニアラサレハ裁判官タルヲ許サス而シテ司法權ノ獨立モ獨立ノ日ニ獨立スルニアラス蓋シ由リ來ル所アリ明治十七年十二月二十六日太政官第百二號達判事登用規

則ハ是レ實ニ獨立ノ紀元トモイフヘキモノナリ其第一條ニ曰ク判事ニ登用スルハ法學士代言人及ヒ試験ヲ行ヒ及第シタル者ニ限ルヘシト之ヲ要スルニ試験及第ノ者ニアラサレハ裁判官タルヲ得ス但シ判事補ノ職ヲ奉シ五年以上格勤シ學識經驗判事ノ資格ニ適スル者曾テ判事ノ職ヲ奉シ五年以上格勤シ轉官シタル者ハ試験ヲ用ヒス直ニ判事ニ任スルコトアルヘシ(判事登用規則第九條第十條)

刑法第二篇第四章第一節乃至第六節第九章第二節第二百八十四條乃至第二百八十七條第三篇第二章第一節乃至第六節ニ掲ケル重輕罪ヲ犯シテ有罪ノ言渡ヲ受ケ其確定シタル者未丁年者品行方正ナラサル者身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者賭博犯ニ付懲罰一年以上ニ處セ

ラレシ者及ヒ懲戒ニ依テ免官ト爲リタル者ハ登用スルコトヲ得ス(判事登用規則第三條明治十九年勅令第四十號裁判所官制第九條)

新ニ裁判官ニ任セラル、者ハ治安裁判所ニ於テ其職務ニ服シ治安裁判所裁判官又ハ檢察官ニシテ一年以上其職務ニ服シタル者ハ始審裁判所裁判官ニ任スルコトヲ得裁判官檢察官ニシテ五年以上其職務ニ服シタル者ハ控訴院裁判官ニ任スルコトヲ得(裁判所官制第十一條以上ハ裁判官ヲ登用シ其昇進スル規則ニシテ始

ヲ慎ム所以ナリ
裁判官ハ刑ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其職ヲ免セ

○司法權

ラル、コトナシ是レ終ヲ慎ム所以ニシテ始アリ終アルニ
アラサレハ以テ司法權ノ獨立ヲ保持スル能ハサルナリ此
事モ亦憲法ニ始マリシコトニハアラズ裁判所官制第十二
條ニ於テ嘗テ明示セラレタル所ナリ該條ニ曰ク裁判官ハ
刑事裁判又ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其意ニ反シテ
退官及ヒ懲罰ヲ受クルコトナシト

懲戒ハ明治九年四月十四日太政官第三十四號達官吏懲戒
例ニ定ムル所ニ依ル此懲戒例ニ依レハ懲戒ノ法ニ三種ア
リ第一譴責第二罰俸第三免職ニシテ皆本屬長官即チ裁判
官ニ對シテハ司法大臣ノ處分スル所ナリ譴責ハ懲戒ノ輕
キモノニシテ譴責書ヲ付ス罰俸ハ一月分ノ十分一ヨリ少
カラズ三月ヨリ多カラサルノ俸ヲ奪フ俸ヲ追スルノ法ハ

其一月給俸半額以下ハ一月俸中ニテ追了シ其以上ハ毎月
給俸ノ半額ヲ領置シ數滿テ大藏省ニ送付ス(明治十三年太
政官第四號達改定)懲戒ヲ以テ免職スル者奏任以上ハ其狀
奏請シテ之ヲ免シ位記ヲ返上セシム又裁判官檢事等ノ功
過行能ヲ考覈シ司法大臣ノ銓定ニ供スルカ爲メ明治十七
年十二月十三日司法省號外達ヲ以テ考績條例ヲ定メラレ
タリ考績ノ法ニ四善十最三殿アリ院長所長檢事長上席檢
事ハ管轄廳職員ヲ監視シ其功過行能ノ實ヲ精密調査シ每
年九月司法大臣ニ上申ス

賢ヲ進ノ能ヲ擧ケ惡ヲ退ケ過ヲ懲ス所以ノ法ハ備ハレリ
トイフヘシ眞ニ善ク此法ヲ實行シテ其宜ヲ得ハ裁判官ヲ
獨立セシメ終身官タラシムルノ實ヲ得ヘキナリ

○司法權

裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得憲法第五十九條此個條ハ所謂ル裁判公行ノ原則ヲ示シタルモノニシテ公行ハ即チ密行ノ反對ニシテ裁判ヲ公行スルハ孟子ニ所謂ル國人皆殺スヘシトイヒ然ル後チ之ヲ殺ストイフノ意ニ外ナラス裁判ヲ密行スルハ其害ニアリ一ハ假令ヒ公平正當ノ處置ヲ爲スモ世人チシテ疑念ヲ抱カシムルノ害アリ一ハ密行スレハ或ハ怠慢或ハ輕忽或ハ不正ノ處置ヲ爲スニ至ルノ害アリ其極私心ヲ以テ強嚇詐言ヲ施シ終ニ拷問法ヲモ用フルニ至ルヘシ故ニ此害ヲ避ケ眞ニ正當ノ處置ヲ行ヒ裁判ノ信用ヲ厚カラシメシトスルキハ必ス公行セサルヘカラズ

且ツ如此クナラサレハ裁判官ノ獨立ハ一面ニ向フテハ羈絆ヲ受ケサルモ他ノ一面ニ向フテハ專横ノ處置アルチ免レサルヘシ獨立ト公行トハ併行シテ偏廢スヘカラサルモノニシテ此ニ此原則ヲ明示セラレタルモ他アルニアラサルナリ

佛國憲法ニハ裁判公行ト裁判無報トノ二事ヲ示シタリ昔日佛國ニ於テハ裁判官ニ於テ報酬ヲ受クルノ例アリ之ヲ以テ特ニ無報ノ事ヲ掲ケタルナリ我國ニ於テモ徳川氏ノ時ニハ苞苴公行シテ裁判ニ報酬アリトイフモ誣言ニアラサルヘシ維新以後ハ如此キノ弊習ハ之ヲ一洗セリ明治八年第九十六號布告訴用界紙規則明治十七年第五號布告訴用印紙規則ヲ以テ昔日ハ界紙ヲ用ヒシメ今日ハ印

○司法權

紙ヲ用ヒシムルカ故ニ裁判有報ノ如クナルモ這ハ是レ所
 謂ル有報裁判トハ大ニ其趣旨ヲ異ニスルモノナリ
 又昔日ハ我國ニ於テハ裁判ヲ密行シテ且ツ拷問ヲ行ヒタ
 リ蓋シ拷問ト密行トハ亦相離ルヘカラサルモノナルヘシ
 公行スレハ拷問ハ人情ニ於テ用フヘカラス密行スレハ假
 令ヒ法律ニハ之ヲ禁スルモ尙ホ或ハ之ヲ用フルニ至ルナ
 リ裁判公行ノ端緒ヲ開キタルハ明治五年十一月五日司法
 省第三十三號達ヲ以テ正副戸長ニ傍聽ヲ許シタルニ在リ
 尋テ明治六年一月二十日司法省達ヲ以テ本省官員並ニ明
 法寮生徒ニ裁判所ノ聽訟斷獄ノ傍聽ヲ許サレタリ而シテ
 人民一般ニ傍聽ヲ許シタルハ明治八年二月二十二日第三
 十號布告ナリ然レモ此布告ハ單ニ民事ノ傍聽ヲ許シタル

ノミニシテ刑事ニハ及ハサリシナリ刑事ニ付テ法律上傍
 聽ヲ明許シタルハ治罪法第二百六十三條ナリ然レモ明治
 八年第三十號布告ニ於テモ亦治罪法第二百六十四條ニ於
 テモ男女ノ間ニ起リシ風儀ニ關スル訴訟及ヒ公安ヲ害シ
 風俗ヲ害スル被告事件ニ付テハ傍聽ヲ禁スルヲ得ルコト
 トセリ
 憲法第五十九條ニ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ニ依リト
 アリ法律上當然傍聽ヲ禁スヘキモノハ豫審判事ノ豫審ナ
 リ又法制局ノ審理判決モ當然密行スルナルヘシ又第三十
 號布告但書ニハ男女ノ間ニ起リシ風儀ニ關スル訴訟ハ此
 限ニ在ラストアルヲ以テ法律上當然傍聽ヲ禁スヘキカ如
 シナレモ其精神ハ決シテ如此クナルニハアラサルナリ故

○司法權

ニ今後別ニ其法律ヲ發行セラル、ニアラサレハ刑事ノ豫
 審ヲ除クノ外ハ裁判所ノ決議ニ依ルニアラサレハ當然傍
 聽ヲ禁スルコトナカルヘシ又刑事ニ於テ傍聽ヲ禁スル
 ハ對審ニ限ルコトニシテ裁判宣告ハ必ス公行セサルヘカ
 ラス然ルニ憲法ニハ對審トアルヲ以テ缺席裁判ニ係ルモ
 ノハ公開ヲ命スル限ニ在ラサルカ如ク聞ユヘケレモ如此
 キ區別ヲ爲スノ趣旨ニハアラサルヘキナリ
 凡ソ争訟ハ司法裁判所ノ裁判スル所ナリト雖モ行政官廳
 ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ニ
 シテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘ
 キモノハ司法裁判所ニ於テ受理スル限ニ在ラス其他特別
 裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノモ別ニ法律ノ定ムル所ニ依

ル(憲法第六十條第六十一條)従前ハ人民ヨリ官署ニ對スル
 訴訟ハ其行政裁判ニ屬スルト司法裁判ニ屬スルトヲ分タ
 ス總テ司法裁判所即チ通常民事裁判所ニ於テ之ヲ受理ス
 ルコト、セリ(明治七年司法省第二十四號達)而シテ裁判所
 ハ行政司法ノ區別ヲ定ムル爲メ之ヲ司法省ニ伺出テ司法
 省ニ於テ行政裁判ニ屬スルモノト思料スルキハ内閣ニ申
 稟シテ其審理ヲ爲スヘキ裁判所ヲ伺定メ又司法裁判ニ屬
 スルモノト思料スルキハ申稟ノ手續ヲ用ヒス並ニ裁判所
 ニ對シ審理スヘキ旨ヲ指令シ其指令書ニハ行政司法ノ區
 別ヲ明示ス裁判所ニ於テ行政裁判ニ屬スル事件ノ審理ヲ
 終結シタルキハ裁判言渡案ヲ作り其判決ノ可否ヲ司法省
 ニ伺出テ又司法裁判ニ屬スル事件ト雖モ官署ノ敗訴スヘ

○司法權

キ場合ニ於テハ司法省ニ伺出ツヘキモノトス司法省ニ於テハ判決伺書ヲ受領シタルキハ意見ヲ付シテ内閣ニ稟シ其裁令ヲ受ケテ裁判所ニ指令ス而シテ内閣ノ裁令ヲ經タル裁判ニ對シテハ控訴上告ヲ爲スヲ許サ、ルナリ(明治十二年司法省丁第十九號達)

又府知事縣令ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ争フキハ内閣法制局ニ於テ裁定ス(明治十三年四月八日第十五號布告府縣會規則第九條)又市町村制ニ依レハ府縣參事會郡參事會等ニモ行政ノ裁判權アリ此等ハ眞ニ所謂ル行政裁判所タルモノナリ又小笠原島ニ於テハ東京府出張所伊豆七島ニ於テハ該島吏并ニ清國朝鮮國駐留領事ノ民刑事事件ヲ裁判スル場合及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄

轄スル場合其他戒嚴令ノ場合等ハ是レ特別裁判所ノ管轄ニ屬スルモノニシテ所謂ル別ニ法律ヲ以テ定メタルモノナリ

第七章 臣民權利義務

臣民ハ即チ國人ニシテ一國ヲ構成スル所以ノモノナリ凡ソ其國ニ現在スル者ハ皆國人タルニアラス故ニ國人タルノ分限ヲ明ニセサルヘカラス然レモ其分限ヲ定ムルニハ種々ノ場合アリテ一二個條ノ盡スヘキニアラス即チ父母共ニ日本人タルコトアリ父母ノ内一人ハ日本人ニシテ一人ハ外國人タルコトアリ又其父母ハ正當ノ婚姻ヲ爲シタルアリ或ハ正當ノ婚姻ヲ爲サ、ルアリ其正當ノ婚姻ヲ爲サ、ル者ハ或ハ日本ニ於テ子ヲ舉クルコトアリ或ハ外國

○臣民權利義務

ニ於テ子ヲ擧クルコトアリ又父母共ニ知レサル子アリ或
 ハ父ノ知レスシテ母ノミノ知レタル子アリ此等種々ノ場
 合ニ於テ其分限ヲ定メサルヘカラス又日本人ニシテ其分
 限ヲ失フコトアルヘク又或ハ外國人ニシテ日本人タル分
 限ヲ有シ或ハ日本人ノ分限ヲ失フタル者ニシテ再ヒ其分
 限ヲ得ル等ノ事アリ而シテ此分限ヲ得喪スル所以ハ何レ
 ノ國ニ於テモ之ヲ民法中ニ示シタリ我國ニ於テモ民法草
 案ニハ其人事編中ニ之ヲ示サレタリ憲法ニ日本臣民タル
 ノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ルトアルハ即チ民法ニ示ス
 所ニ依ルコトナイヒ其要件ヲ定ムルコトチ民法ニ讓リシ
 モノナルヘシ故ニ他日民法ノ頒布セラレ、ニ至ラハ自ラ
 明了ナルニ至ラシテ從前ハ明治六年一月十八日第二十一號

布告妻妾ニアラサル婦女ニシテ分娩スル兒子ハ一切私生
 ナリ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事但男子ヨリ己レノ子
 ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戶長ニ請テ免許ヲ得候者ハ其
 子其男子チ父トスルヲ可得事トアルニ依テ外國人ト日本
 人トノ間ノ私生子ノ分限ヲ定メ又明治六年三月十四日第
 百三號布告ニ外國人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ
 分限ヲ失フヘシ若シ故有テ再ヒ日本人タルノ分限ニ復セ
 シコトヲ願フ者ハ免許ヲ得能フ可シ日本人ニ嫁シタル外
 國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシト
 アルニ依テ其分限ノ得喪ヲ定ムヘシ其他ハ總テ此布告ノ
 趣旨ヲ推シ條理ニ照シテ之ヲ論定スルノ外ナキナリ
 日本人タルノ分限ハ今日ニ在テハ尙ホ未ダ詳ナラサルモ

○臣民權利義務

ノアクト雖モ要スルニ憲法ニ示ス所ノ權利義務ハ日本人
 タル者ノミニ限ル所ナレハ外國人ハ勿論凡ソ日本人タル
 分限ヲ有セサル者ハ憲法上ノ義務ヲ負フコトナク又其權
 利ヲ有スルコトナシ故ニ又日本人トシテ法律ノ保護スル
 所ニアラサルナリ
 今ヨリ日本臣民ノ權利義務ヲ説述スヘシ然レモ憲法ニ示
 ス所ハ彼此混淆スルヲ以テ余ハ其類ヲ分チテ説述セント
 ス即チ左ノ如シ

- 第壹 參政權(憲法第十九條)
- 第貳 請願ノ權利(第三十條)
- 第參 身體ノ自由(第二十三條)
- 第肆 居住及ヒ移轉ノ自由(第二十二條)

- 第五 信教ノ自由(第二十八條)
 - 第陸 言論著作印行集會及ヒ結社ノ自由(第二十九條)
 - 第柒 住所ノ不侵(第二十五條)
 - 第捌 信書ノ不侵(第二十六條)
 - 第玖 所有權ノ不侵(第二十七條)
 - 第拾 兵役ノ義務(第二十條)
 - 第拾壹 納稅ノ義務(第二十一條)
 - 第拾貳 不私裁判權(第二十四條)
- 又參考ノ爲メニ佛國憲法ニ於テ國土ニ擔保シタル權利ヲ
 舉ツレハ左ノ如シ
- 第一 法律上ノ平等イガリテ、しうゐる
 - 第二 各人ノ自由りべるて、あんぢうぢぢゐる

○臣民權利義務

第三家宅不侵わんうねらびりて、ぢゆとみしゝる

第四所有權ふるふりて

第五宗教ノ自由りべるて、るりじゆゝ

第六出版ノ自由りべるて、ぢゆふれす

第七職業ノ自由りべるて、ぢゆとらわねゆ、ぢゆとらんぢゆすと

りて

第八集會ノ權利とるわ、ぢゆとしあしよん、ぢゆとれもによん

第九請願ノ權利とるわ、ぢゆべちしよん

第十裁判ノ無報及ヒ其公行ぐらちゆいて、ぢゆびふりして、ぢゆ

ら、ぢゆすちゝす

第十一租税ノ表決ばつと、とらんばゝ

第十二官吏ノ責任れすばんさびりて、で、あじやんで、ぶゝを

あゐる

第十三政權ノ分離せをらしよんで、ぶゝをあゐる

以上十三個ノ權利ハ佛國憲法ニ於テ國土ニ擔保シタルモ

ノナリ然レ此中過半ハ自然ニシテ人ノ享有スル權利即

チ所謂ル天賦ノモノナレハ特ニ法律ニ明示シテ擔保スル

ヲ要セサルナリ然ルニ之ヲ擔保セシテ以テ觀レハ其以前

ニ在テハ之ヲ侵害セシコト知ルヘキナリ然ラサレハ何ソ

特ニ之ヲ擔保スルノ明文ヲ掲クルヲ要センヤ又今ハ法律

ニ明文ヲ掲ケテ特ニ之ヲ擔保スト雖モ亦其例外變則ノ法

律アリテ之ヲ制限シ之ヲ抑止スルモノナキニアラス

我國ニ於テモ亦同シ憲法ニ掲グル權利ノ大半ハ人ノ天賦

ノモノニシテ特ニ明示スルヲ要セサルモノナリ然ルニ之

○臣民權利義務

ナ明示シタルハ從前ハ之ニ反スルモノアリシカ故ナリ而
 シテ之ニ反スルモノアリシハ要スルニ今ノ所謂ル法律ナ
 ルモノ、ナカリシカ故ナリ昔日ノ法律ハ法律ニアラスシ
 テ政府ノ意見ヲ表明シタルモノニ外ナラス故ニ夫ノ秦制
 ト異ラサルモノアリ即チ政府ノ意見ヲ以テ法令ト爲スト
 カ故ニ法令ヲ學ハント欲スル者ハ吏ヲ以テ師ト爲サ、ル
 ナ得ス而シテ其害タル或ハ秦制ヨリ甚シキモノナキニア
 ラス何トナレハ表面ハ法令ヲ以テ師ト爲サシメテ而シテ
 其實ハ吏ヲ以テ師ト爲サ、ルヲ得サルモノアレハナリ今
 後ハ決シテ然ラス表裏共ニ法律ヲ以テ師ト爲シテ更ニ他
 ナ願ルコトナシ法律ノ禁スル所ハ善ト雖モ之ヲ行フヲ得
 ス法律ノ令スル所ハ惡ト雖モ尙ホ之ヲ爲サ、ルヲ得ス其

令セス禁セサル所ハ之ヲ爲スト爲サ、ルト一ニ各人ノ自
 由ニ在リ法律ハ政府ト人民トノ規約ニシテ雙方ノ承諾ヲ
 以テ成リタルモノナリ之ヲ承諾シタル者ハ一己ノ意見ヲ
 以テ犯スコトヲ得ス
 第壹日本人ハ文武官ニ任セラレ及諸般ノ公務ニ就クノ權
 利アリ其權利アリト雖モ法律命令ノ定ムル所ノ資格ヲ有
 セサル者ハ其權利ヲ行フヲ得ス(憲法第十九條)此個條ハ
 佛國憲法ニ所謂ルいがりて、しうる即チ法律上ノ平等ナル
 モノヲ認メ而シテ臣民ニ與フルニ參政權ヲ以テシタルモ
 ノナリ何レノ國ニ於テモ往昔ハ門閥アリテ相當ノ門閥ア
 ルニアラサレハ官職ニ任スルコトヲ得サリシナリ我國ニ
 於テモ門閥ニ由テ官職ヲ授クルノ習慣ハ其因襲スルコト

○臣民權利義務

久カリシナリ而シテ門閥ノ初ハ成務天皇ノ時ニ在リシナルヘシ國郡ニ長ヲ立テ縣邑ニ首ヲ置キ其地ハ首長ノ固有ニ屬シ其職ハ各家ニ世襲シメタルハ成務天皇ノ時ニ在レハナリ又諸氏ノ族姓ヲ改メテ八姓十八氏ト爲シタルハ孝德天皇ノ時ニ在リ而シテ如此ク姓氏ヲ改メタルハ貴賤ヲ序スル所以ニシテ法律上貴賤ノ別ヲ立テタルモノナレハ今日ノ法律上ノ平等トハ正ニ相反スルコトナリ而シテ貴賤其稱呼ヲ異ニシ婚姻ヲ通セス市籍ノ人ハ諸司諸家ニ仕フルヲ禁シ五位以上ハ畿内諸國ニ寄留スルヲ許サ、ル等ノ制アリ其後藤原氏ノ權ヲ專ラニスルニ及ヒテハ勅任諸官ハ其族ニ在ラサルハナク百僚皆門閥品流ヲ論シ武士ヲ輕賤シテ遂ニ大權ヲ源氏ニ歸セシムルニ至リタリ源氏モ

亦藤原氏ノ家例ニ倣ヒ征夷大將軍ノ職ハ其子孫ノ外之ニ任スルヲ得ストシ其諸臣ヲ待ツ亦必ス門閥ヲ論ヒリ北條氏ニ及ヒ朝廷ノ門地ヲ重ニスルニ因リ藤原氏ヲ分テ五流ト爲シ清華ヲ七派ト爲シタリ茲ニ於テ始テ攝家清華大臣家羽林家名家諸大夫等ノ稱アリ攝家ハ攝政關白ト爲ルヲ得ルノ家清華ハ太政大臣ト爲ルヲ得ルノ家ニシテ清華ハ一ニ之ヲ華族トイヒタリ今ノ所謂ル華族モ蓋シ此ニ因源セシモノナルヘシ大臣家ハ大臣ト爲ルヲ得ルノ家ナレトモ大將ハ兼ヌルヲ得ストセリ羽林家ハ中少將ヨリ大納言參議ニ至ルノ家名家ハ儒學ヲ以テ進ミ辨官藏人頭ニ至ルノ家ニシテ諸大夫ハ四位ニ過クルヲ得ス或ハ其才ヲ以テ大中納言ニ至ル者アリト雖モ本ト微賤ノ者タリ又諸國地頭

○臣民權利義務

ノ如キモ僧侶商人借上輩ヲ用ヒテ代官ニ補フルヲ得ル采
 邑ヲ借上輩ニ賣ル者ハ之ヲ沒収セリ又足利氏ノ時ニモ其
 管領以下ノ諸官ハ皆勳舊ノ家ニ歸シ斯波細川畠山三家ヲ
 シテ交々管領ニ任セシメ之ヲ三職ト稱シ山名一色細川畠
 山四家ヲ侍所別當ニ任シ之ヲ四職ト稱シ又四殿衆トモ稱
 シタリ又其舊家ヲ分テテ十二級ト爲シ其一ヲ一族トイヒ
 其二ヲ大名トイヒ其三ヲ守護トイヒ其四ヲ外様トイヒ其
 五ヲ評定衆トイヒ其六ヲ御供衆トイヒ其七ヲ申次トイヒ
 其八ヲ番方トイヒ其九ヲ國人トイヒ其十ヲ奉行トイヒ其
 十一ヲ末士トイヒ其十二ヲ相伴衆部屋衆走衆等トイヒタ
 リ德川氏ノ時ニハ諸大名ヲ分テテ國主准國主城主領主ト
 爲シ其官ヲ拜スル家格ニ從テ一様ナラス其侍從及ヒ三位

以上ニ列スルヲ得ル者ヲ號シテ公卿トイヒ公卿ハ三家三
 卿及ヒ前田氏ニ過キス萬石以上ノ列侯ハ皆從五位下ニ叙
 ス旗下ノ士萬石以下モ亦叙爵スル者アリ古代ノ門閥ニシ
 テ大名旗下ノ外ニ高家ト稱スル者アリ其祿ハ萬石以下タ
 リ又德川氏ノ家臣ヲ旗本ト稱シタリ其旗下ノ士タルヲ以
 テナリ旗下六千石以上ヲ交代寄合トイヒ三千石以上ヲ寄
 合トイヒ三千石以下ヲ小普請トイフ平常武技ヲ講習スル
 ヲ以テ其務ト爲ス旗本ハ一ニ之ヲ目見以上トイフ此外朝
 班ニ列セサル者ヲ家人トイヒ之ヲ目見以下ト稱シタリ又
 大名ノ家ニ在テモ其家人ニ種々ノ別ヲ立テ皆門地ニ從テ
 其祿其職ニ差等アリ大畧上士中士下士ノ別アリテ下士ハ
 卒族ニシテ中士ハ准士族上士ハ眞士族ナリ維新ニ至テ卒

○臣民權利義務

族以上ヲ皆士族ト爲シタリ士族以上ハ曾テ租稅ヲ納メサ
 ルノミナラス反テ俸祿ヲ受ケテ之ヲ世襲シ其俸祿ハ維新
 ニ至テ之ヲ金祿公債證書ニ代ヘタリ又刑事ノ裁判ニ付テ
 モ人民ト異ナリ士族以上ハ死刑ニハ切腹ヲ用ヒ破廉耻甚
 シキ者ハ除族シテ斬首スルコト、爲シタリ切腹ハ一ノ閏
 刑ナリ新律綱領ノ時ニ於テモ士族ニハ閏刑アリテ本罪答
 刑ニ該ルモノハ謹慎ニ處シ杖刑ニ該ルモノハ閉門ニ處シ
 徒刑ニ該ルモノハ禁錮ニ處シ流刑ニ該ルモノハ邊戍ニ處
 シ死刑ニ該ルモノハ自裁ニ處シタリ而シテ自裁ハ即チ切
 腹ナリ若シ賊盜及ヒ賭博等ノ罪ヲ犯シ破廉耻甚シキモノ
 ニシテ答杖ニ該ルモノハ廢シテ庶人即チ平民ト爲スニ止メ
 徒刑以上ハ仍ホ本刑ヲ加ヘタリ又罪科未タ定ラサル者即

チ未決囚ハ監倉ニ入レ庶人ト異別スルコト、爲シタリ之
 チ要スルニ只公務ニ付テ差等アルノミナラス萬般ノ事皆
 差等アリシナリ
 族籍ニ從テ差等アルノミナラス刑法ノ處分ノ如キハ官吏
 ニ於テモ亦差等アリ官吏公罪ヲ犯シ及ヒ過誤失錯ニ出テ
 答刑ニ該ルモノハ官一等ヲ降シ徒刑二年以上ニ該ルモノ
 ハ官二等ヲ降スコト、爲シタリ又官吏私罪及ヒ有心故造
 ノ罪ヲ犯シテ答刑ニ該ルモノハ士族ノ閏刑ニ進スルコト
 、爲シタリ且ツ士族官吏ニ閏刑アルノミナラス僧侶モ亦
 庶人ト異ナリ即チ有官ノ僧侶ハ總テ官吏ト同ク論シ無官
 ノ僧侶ハ士族ト同ク處分セリ又一家族中ニ在テモ尊卑ヲ
 分チテ其罪其刑ヲ異ニシ尊屬親ト卑屬親トノ間ニハ大ナ

○臣民權利義務

ル差等ヲ設ケタリ總テ尊屬親ノ卑屬親ニ對スル罪ハ其刑輕クシテ卑屬親ノ尊屬親ニ對スル罪ハ其刑重シ今日ノ刑法ニ於テモ卑屬親ノ尊屬親ニ對スルモノハ其罪重シト雖モ尊屬親ノ卑屬親ニ對スルハ別ニ輕キニアラス常人ト同ク論スルナリ但シ如此ク卑屬親ノ尊屬親ニ對スル罪ノ重キハ只我刑法ノミノコトニアラス佛國刑法ノ如キモ亦同様ナリ又舊律ニ於テハ家長ノ奴婢ヲ殺傷スルハ其罪輕クシテ奴婢ノ家長ヲ殺傷スルハ其罪重ク又干名犯義子孫違教等ノ律アリテ上下貴賤ノ差等甚タ大ナリ今日ニ在テハ只一般人民カ公務ニ就クノ權アルノミナラス大畧皆平等タルヲ得ルニ至リタリ左ニ其沿革ノ梗概ヲ示サン

第一一般人民カ公務ニ就クノ權即チ參政權ヲ有スルニ至

リタル源ハ實ニ慶應三丁卯年十二月十四日徳川内府大政ヲ返上シ將軍職ヲ辭退スルニ當テ發セラレタル御沙汰書ニ在リ此御沙汰書ハ公議ヲ盡シ輿論ヲ採リ言路ヲ洞開スルハ勿論又門閥ヲ廢シテ貴賤トナシ其才能ニ隨テ官職ニ就クコトヲ許シタルモノナリ(緒言第四章ノ始ニ其全文ヲ掲ケタリ)

第二平等ヲ認メタルハ明治三年九月十五日ノ布告ナリ其文ニ曰ク自今平民苗字被差許候ト

第三ハ明治四年四月十七日ノ布告ナリ其文ニ曰ク自今平民乘馬被差許候ト

第四ハ明治四年八月二十八日ノ布告ナリ其文ニ曰ク穢多非人等ノ稱被廢候自今身分職業共平民同様タルヘキ事ト

○臣民權利義務

維新前ハ平民ニハ苗字ヲ稱スルヲ許サス又馬ニ乗ルカ如
 キコト迄モ之ヲ禁シタリ且ツ平民ト士族ト差等アルノミ
 ナラス最下等ノ人民ヲ穢多非人ト稱シ平人ハ穢多非人ト
 伍スルコトナシ其賤辱スルノ甚シキ以テ人類ト爲サス而
 シテ其事タル因襲ノ久シキカ故ニ今日ニ在テモ尙ホ其陋
 習ヲ脱セサルモノ、如シ故ニ人民中ニ在テ或ハ自由ヲ唱
 ヘ或ハ平等ヲ論スル者ニテモ官吏華族等凡ソ上位ニ在ル
 者ニ對シテハ其人民ト平等ナラサルヘカヲサルノ理ヲ談
 スレモ其下位ニ在ル者即チ從來ノ穢多非人ニ對シテハ之
 チ新平民ト稱シテ尙ホ賤辱スルニ似タリ然レモ如此キハ
 勢ノ然ラシムル所ニシテ蓋シ已ムヲ得サルナリ歐米人ノ
 如キハ自稱シテ平等自由ノ人ナリトイヘモ只之ヲ口ニス
 ルノミニシテ其實ハ大ニ之ニ反スルモノアリ故ニ例ヘハ
 車夫舟子馬丁等ニ對シテ全ク平等對當ノ交際ヲ爲ス者ハ
 未ダ曾テ之ヲ見サルナリ且ツ自家ニ雇使スル車夫馬丁ノ
 如キハ車夫馬丁ノ意思ヲ以テ解傭スルヲ得ルノ相違アル
 ノミニシテ其他交際ニ至テハ夫ノ奴隸ト異ナル所アルヲ
 見ス加之東洋人等ヲ目シテ野蠻ト爲シ大ニ之ヲ輕侮セリ
 是レ所謂ル各人平等ノ原則ニハ背反スルノ甚シキモノナ
 レモ更ニ自ラ顧ミ自ラ戒ムル所ナシ而シテ其婦人ニ對ス
 レハ輒チ曰ク天性柔弱ノ者ナレハ之ヲ扶持シ之ヲ愛護セ
 サルヘカラスト若シ夫レ天性柔弱ノ者ヲ扶持愛護スルヲ
 道理ナリトモハ何ノ爲メニ野蠻ノ人ハ之ヲ扶持愛護セサ
 ルヤ固トヨリ夫妻ト他人トハ異ナルヘキカ故ニ特ニ扶持

○臣民權利義務

愛護スルコトハ是レナカルヘキモ之ヲ輕侮シ賤辱スルノ道理ハ萬々アルヘカラサルコトナリ野蠻ノ人ハ身體ハ強壯ナルモ其才知ニ乏シクシテ衣食住共ニ其全キヲ得サル者ナレハ之ヲ憫諒セサルヘカラス夫ノ鰥寡孤獨ト何ソ撰マン鰥寡孤獨ハ仁政王道ヲ行フ者ノ愛憐スル所ナリ歐米人ハ仁政王道ヲ惡政邪道ト爲スカ然レモ如此キハ徒ニ歐米人ノミニ限ラス人情ノ免ル能ハサル所ニシテ眞ニ所謂ル平等ノ理ヲ守リ自由ノ道ニ從フハ聖人モ尙ホ難キ所ナルヘケレハ決シテ咎ムヘキニハアラス只吾人ハ自ラ慎ミ自ラ戒メテ此平等此自由ノ道理ヲ自ラ實行スルヲ務ムヘキノミ自ラ己レヲ修ムルノ急ニシテ未ダ他ヲ咎メ他ヲ責ムルノ暇アラサルヘキナリ

又人民ハ固トヨリ平等タルニ相違ナシト雖モ長幼ノ序ナキ能ハス君臣父子夫婦ノ分ナキヲ得サルナリ已ニ其分アリ其序アルニ於テハ隨テ平等ナルヲ得サルモノアリ只其差等ノ甚シキコトナキヲ要スルノミ况ンヤ又賢愚貧富ノ別アルニ於テハ其差等ナキコト能ハス故ニ人民ハ齊ク官職ニ任スルノ權アリト雖モ其賢愚貧富等ノ差別ニ由リ其資格ヲ異ニスヘキナリ是レ亦自然ノ理勢ナリ

第五ハ明治四年十二月十八日ノ布告ナリ其文ニ曰ク華士族卒在官之外自今農工商之職業相營候儀被差評候ト

第六ハ明治五年四月九日ノ布告ナリ其文ニ曰ク自今華士族子弟厄介之輩平民籍ヘ加入爲致候儀可爲勝手ト

從前ハ不平等ノ主義ナリシカ故ニ只下ノ上ヲ侵スヘカラ

○臣民權利義務

サルノミナラス又上ノ下ニ混スルコトモ之ヲ禁シタリ然レレ維新ニ及ヒテ已ニ平等主義ヲ認メラレタルヲ以テ此禁ヲ解カレタルナリ

第七ハ明治五年八月晦日大藏省第百十八號布告ナリ其文長キヲ以テ此ニハ只其要領ヲ示スノミ

一從前土地之風俗ニ依リ舊慣ヲ私法トナシ候類間々有之或ハ祖先ノ代ニ召使候者へ地所ヲ付與致シ候分其子孫ニ至迄家抱杯ト唱へ家來同様ノ扱ニ致シ一村ノ者同輩ニ見做サス或ハ他ヨリ入村スル者水呑ト唱へ是亦同輩之交リ不致等ノ類間々有之人民協和交際之道ニ相反キ候間右等舊習ヲ以テ家格相立候儀堅可令禁止事
一古來荒蕪ノ地ヲ拓キ一村ヲ取立候者之ヲ草分ケト名ケ

舊家タルノ故ヲ以テ他人ヲ輕蔑致シ往々非義ノ舉動致シ候者有之趣最祖先ノ功績ニ誇リ今日ニ至リ他人ヲ凌ク可キノ理無之候間自今右等ノ唱へ令禁止暴慢ノ所業致ス可ラサル事

昔日ハ華士族平民ノ不平等ナルノミナラス平民ノ間ニ在テモ差別ヲ立テ平等ナラサリシナリ之ヲ平等ナラシメタルハ實ニ此布告ニ由ルコトナリ
法律上ノ平等ヲ認ムルハ人民ニ參政ノ權利ヲ與フルノ第一着ナリ而シテ維新ノ當時已ニ參政ノ權利ヲ與フルノ端緒ヲ開キ且ツ法律上ノ平等ヲ認メラレタルハ前述ノ如シ今日ハ明ニ憲法ニ特書シテ參政ノ權利ヲ與ヘラレタリ然レレ其權利ヲ行フニハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ヲ有セ

○臣民權利義務

サルヘカラス其資格ハ文官ニ付テハ明治二十年七月二十三日第三十七號勅令文官試験試補及見習規則ニ從テ之ヲ定ム(明治二十二年七月二十三日閣令第十八號文官試験試補及見習規則ニ關スル細則及ヒ同年同月二十五日閣令第十九號參照)又裁判官ノ資格ハ判事登庸規則ノ定ムル所ニ依ル其他陸海軍人軍屬帝國會議員府縣會議員等凡ソ公務ヲ執ル者ハ皆各其法律命令ノ定ムル資格ヲ有セサルヘカラス今其法律命令ハ一々枚舉セズ

第貳日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲スコトヲ得(憲法第三十條)此個條ハ所謂請願ノ權利(とろぬ、と、べちしよん)ヲ認メタルモノニシテ此請願ノ權利中ニハ請願ト建白トノ二個ヲ包含ス佛國憲法ニ

モ此權利ヲ明示セリ之ヲ要スルニ此權利ヲ認メタルハ言路ヲ洞開シ下情ヲ上達スルニ外ナラス言路洞開下情上達ノ方法ハ古代ヨリ已ニ行ハレタルモノニシテ孝德天皇大化元年八月鐘匱ヲ朝ニ設ケラレシハ即チ此方法ヲ行ハレタルナリ請願者ヲシテ其請願書ヲ匱中ニ投入シ鐘ヲ打テ之ヲ天皇ニ報セシム奸官惡吏モ之ヲ妨シルニ由ナカリシトイフ然レモ當時ハ今日ノ如キ區別ナシ建白請願訴訟等總テ己レノ爲メ人ノ爲メニ天皇ニ上奏スルコトハ皆其中ニ包含セリ同天皇ハ大化二年ニ於テ更ニ左ノ詔ヲ發セラレタリ

孝德天皇大化二年二月戊申。天皇幸宮東門。使蘇我右大臣アキツミカミトシロシメス詔曰。明神御宇日本ヤマトチ倭根子天皇。詔於集侍卿等臣連國造伴

○臣民權利義務

造及諸百姓。朕聞明哲之御民者。懸鐘於門而觀百姓之憂。作屋於衢而聽路行之謗。雖芻蕘之說。親問爲師。由是朕前下詔。曰。古之治天下。朝有進善之旌。誹謗之木。所以通治道而來諫者也。管子曰。黃帝立明堂之議。上觀於賢也。堯有衢室之問。者下聽於民也。舜有告善之旌。而主不蔽也。禹立建鼓於朝。而備訊望也。湯有總術之廷。以觀民非也。武王有靈臺之囿。而賢者進也。此古聖帝明王所以有而勿失。得而勿亡也。所以懸鐘設匱。拜收表人。使下憂諫。人納表于匱。詔收表人。每旦奏請。朕得奏請。仍又示群卿。便使勘當。庶無留滯。如群卿等。或懈怠不勤。或阿黨比周。朕復不肯聽諫。憂訴之人。當可撞鐘。詔已如此。既而有民。明直心懷國士之風。切諫陳疏。納於設匱。故今顯示。集在黎民。其表稱緣。奉國政到於京民。官官留使於雜役云々。朕

猶以之傷惻。民豈復思至此。然遷都未久。還似于寶。由是不得。不使而強役之。每念於斯。未嘗安寢。朕觀此表。嘉歎難休。故隨所諫之言。罷處々之雜役。昔詔曰。諫者題名。而不隨詔命者。自非求利。而將助國。不言題。不諫。朕廢忘。又詔集在國民。所訴多在。今將解理。諦聽所宣。其欲決疑。入京朝集者。且莫退散。聚侍於朝。日本書記

此詔ニ由テ我邦ニ在テハ大化ノ昔ヨリシテ既ニ言路洞開ノ途アリシコトヲ知ラン近世徳川氏ノ時ニ及ヒテモ享保六年ノ定メアリ載セテ科條類典ニ見ユ即チ評定所ノ前ニ訴狀箱ヲ備ヘ建札ヲ設ケタリ訴狀箱ハ一名之ヲ口安箱トイヒテ維新後ニ至ル迄猶ホ之ヲ存シタリ而シテ此訴狀箱モ亦今日ノ建白請願訴訟ノ三事ニ關係スルモノナレトモ當

○臣民權利義務

時ニ在テ眞成ノ訴訟ハ評定所ニ於テ之ヲ裁判セシカ故ニ
上訴ノ時ニアラサレハ訴狀箱ニ投入スルヲ得サリシナリ
左ニ其揭示文ヲ示サン

享保六丑年

評定所前訴狀箱ニ有之文言之事

覺

- 一 御仕置筋之儀に付 御爲に可成品之事
- 一 諸役人をはしめ私曲ひふんこれある事
- 一 訴訟有之時役人せんきをとけず永々捨置にれいて
は直訴すへき旨相斷候上出すへき事
- 右之類直訴すへき事
- 一 自分爲によろしき儀或は私之いこんを以人之惡事

中間敷事

- 一 何事によらず自分慥にしらさる儀を人にたのまれ
直訴致間敷事
- 一 訴訟等之儀其筋々之役所にいまた不申出内或は裁
許いまた不濟内此兩様申出間敷事
- 一 惣てありていを不申少にても事を以つくるぬきよ
せつかきのせ中間敷事
- 右之類は取上なしかき物は則やきすつへし尤たくみ事
の品によりて罪科に行るへしかき物はかたく封持來る
へし訴人之名並宿書付無之は是又取上さる者也

丑八月

奉行

維新後ニ至リテハ初メニ慶應三年丁卯十二月十四日ノ御

○臣民權利義務

沙汰アリ(前ニ掲ケタレハ參照スヘシ)此御沙汰ニ所謂ル言
 路洞開トアルハ即チ今日請願規則ノ基礎ト爲リタルモノ
 ニシテ此御沙汰及ヒ御誓文等ニ參照スレハ只請願ノミナ
 ラス其他今日ノ事皆人民ヨリ之ヲ求メタルニアラスシテ
 陛下ノ叡慮ヨリ出テタルモノナルコト知ルヘキナリ
 次ニ明治元年二月十七日三職ヨリノ諭達アリ曰ク外國交
 際ヲ初メ萬機悉ク既往將來ヲ論セス忌憚ナク詳論極言致
 スヘシト又同年十月行在チ東京ニ移サル、ニ及ヒ御着輦
 後ハ萬機御親裁ニ付不憚忌諱正議直諫スヘシトノ達アリ
 夫レ如此ク上言スヘキ旨ノ達ハ一ニシテ足ラサリシカモ
 其手續ニ至リテハ更ニ一定セシモノナカリシナリ其後明
 治二年ニ至リ其二月八日ノ布告ヲ以テ手續ヲ定メ即チ建

言致度向ハ書面ヲ以テ公議所ニ差出スヘキコトヲ定メラ
 レタリ

徳川氏ノ時ニ在テハ評定所前箱即チ目安箱アリテ其箱ニ
 ハ訴訟其他上書建白行政處分ニ對スル請願等總テ公私ノ
 爲メ公儀即チ幕府ニ上申スル書類ハ皆此ニ投入スヘキコ
 ト、セリ而シテ此前箱ハ維新後尙ホ存在セルニ因リ明治
 元年五月ノ達ニハ以來目安箱ニ入レ建議スル輩ハ忌憚無
 ク姓名ヲ記載スヘシトアリ然ルニ明治六年六月十日ニ至
 リ第百九十九號布告ニテ府縣設置ノ目安箱ヲ廢止シタリ
 而シテ同時ニ建言上書ハ集議院並ニ各地方廳ニ差出ス可
 キモノトセリ故ニ目安箱ハ廢止セラレタルモ決シテ上書
 建言ノ途ヲ杜絶シタルニアラス却テ之ニ改良ヲ加ヘタル

○臣民權利義

ナリ而シテ明治八年四月二十五日第六十八號布告ヲ以テ更ニ之ヲ改正シ諸建白類ハ自今元老院ニ差出スヘシト命セラレタリ故ニ従前集議院若クハ地方廳ニ差出セシモノハ是レヨリ皆元老院ニ差出スコト、爲レリ而シテ此布告ニハ諸建白類トアリテ其種類ノ如何ヲ論セス頗ル漠然タルヲ以テ直チニ同年十一月二十五日第百七十八號布告ヲ以テ諸建白ノ立法ニ關スル者ハ元老院へ其他ハ各主任廳へ差出スヘシトシテ其種類ニヨリ區別シタリ尙ホ明治九年一月十五日第二號ノ達ヲ以テ立法ニ關スル建言書元老院差出方心得ヲ定メタリ故ニ今日ハ建言ニ關スルモノハ此規則ニ依ラサルヘカラス然レモ各地方廳ニ差出ス建言ニ付テハ其手續法律上未ダ一定セス從テ實際ニ於テモ亦

區々其取扱ヲ異ニスヘシ而シテ其第二號達ニ依レハ立法ニ關セサル者ヲ元老院ニ差出ス時ハ之ヲ棄却スルコト、セリ又立法ニ關スル建白書ヲ差出スニハ其建白書ニ本管身分氏名年齢職業住所ヲ記載シ且ツ其氏名ノ下ニ實印若クハ花押ヲ捺捺シ又其建白書ハ正副二通ヲ差出サ、ルヘカラス而シテ其建白ハ邦家ノ爲メ意見ヲ上陳スルモノナレハ其取捨ハ元老院ノ特權ニ屬シ且ツ之ヲ建白者ニ告知セス尙ホ其建白書ニハ普通ノ語辭ヲ用ユヘク又外國語ニハ譯字ヲ附スヘキ等ノ規則アリ其他尙ホ數多ノ手續アルモ別ニ必要ナキヲ以テ之ヲ畧ス其後明治十三年二月第五十三號布告ヲ以テ此第二號達ヲ改正シ人民ノ上書一般ノ名義ヲ以テスルモノハ其何等ノ名義タルヲ論セス一切建

○臣民權利義務

白ト看做シ元老院ニ於テ取扱フヘキモノトセリ故ニ總テ
 管轄廳ヲ經由シ元老院ニ差出スコト、爲レリ
 又請願ニ關スル規則ハ明治十五年十二月第五十八號布告
 請願規則ニ依ラサルヘカラス而シテ此請願規則ニ依ルヘ
 キモノハ人民各自ノ私益ニ關シ行政廳ノ處分ニ對シ請願
 スルモノニシテ天下ノ公益ニ關スルモノハ建白ナレハ此
 請願規則ニ依ルヘキニアラス而シテ此請願規則ニ依レハ
 郡區長戶長ノ職務内ニ屬スル事件ハ其郡區長戶長ニ請願
 シ其郡區長戶長ノ指令ニ服セサル者ハ府縣知事ニ請願シ
 府縣知事ノ指令ニ服セサル者ハ主務大臣ニ請願シ主務大
 臣ノ指令ニ服セサル者ハ内閣ニ請願スヘシ又府縣知事警
 視總監ノ職務内ニ屬スル事件ニ付テハ其府縣知事警視總

監ニ請願シ其府縣知事警視總監ノ指令ニ服セサル者ハ主
 務大臣ニ請願シ主務大臣ノ指令ニ服セサル者ハ内閣ニ請
 願スヘシトアリテ之ヲ要スルニ順次上長官ニ請願スヘキ
 規則ナリ而シテ其請願ハ口頭ニテ陳述スルヲ得ス必ス請
 願書ヲ差出サ、ルヘカラス尙ホ其請願書ニハ請願者自カ
 ラ署名捺印シ屬籍身分ヲ記載シ且ツ其住所ノ地ノ戶長ノ
 與印ヲ要ス但シ戶長其人ニ請願スル者ハ格別ナリトス又
 數人連名ヲ以テ請願スル時ハ各人皆自カラ屬籍身分住所
 ヲ記載シ且ツ署名捺印セサルヘカラス又總代若クハ發起
 人アル時ハ其理由ヲ肩書ニスヘシ又府縣郡區總代又ハ結
 社總代ノ名義ヲ以テ請願スルコトヲ得ストス
 又請願書ハ代人ヲ以テ差出スコトヲ得ス必ス本人自カラ

○臣民權利義務

請願者ト爲リ署名捺印セサルヘカラス又數人連名ノ時ハ
 三名以下ノ總代人ヲ定メ其總代人ヨリ之ヲ差出スヘシ又
 上司ニ差出ス請願書ニハ必ス其經由セシ官廳ノ指令書ヲ
 添附スヘシ而シテ内閣ニ於テ其請願ヲ裁可セル時ハ主務
 省ニ於テ之ヲ執行ス又内閣ノ裁可ヲ經タル者ハ再ヒ其事
 件ニ付テ請願スルコトヲ得ス又裁判所ニ出訴スルコトヲ
 得ス又請願ヲ名トシテ其行政處分ヲ拒ムコトヲ得ス故ニ
 先ツ其處分ヲ受ケ而シテ後ニ請願シテ其執行ノ取消改正
 ヲ求ムヘキナリ又此行政處分ニハ一種ノ期滿免除アリテ
 其處分後五年ヲ經過スル時ハ請願ノ權利ハ期滿免除ニ依
 リ消滅スルナリ又請願ニ付テ此規則ニ違反シ若シクハ刑
 法ノ罪ヲ犯シタル時ハ罰則ニ由リ之ヲ處分シ或ハ輕禁錮

ニ處スルコトアリ尙ホ刑法ニ關スル者ハ刑法ニ由テ處斷

ス

其後明治十六年一月内務省甲第二號ノ告示アリテ請願書
 ハ美濃紙ヲ用ヒ且ツ正副二通ヲ差出スヘキコト、セリ
 又憲法第五十條ニ依リ臣民ハ兩議院ニ請願書ヲ呈出スル
 ヲ得而シテ其手續ハ議院法第六十二條以下ニ依ル即チ人
 民ヨリ議院ニ請願書ヲ呈出セントスルキハ其議員ノ紹介
 ニ依リ之ヲ呈出ス議院ニ於テ之ヲ受領シタルキハ請願委
 員ニ付シテ之ヲ審査セシム請願委員ニ於テ規程ニ適合セ
 サルモノト認ムルキハ議長ハ紹介議員ヲ經テ之ヲ却下ス
 請願委員ニ於テ審査ヲ遂ケ其ノ採用スヘキコトヲ要求シ
 又ハ議員三十人以上採用スヘキコトヲ要求スルキハ議院

○臣民權利義務